

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

NewsLetter

2004.6
No.4

CONTENTS

表紙写真説明



祭署儀礼（龍神祭り）を行う東巴・和学文氏・82歳
（中国・麗江納西族自治州 2004.3.9）

納西語で“智者”を意味する東巴は、祭天・祭風・祭署などの宗教的儀式を執行する祭司であり、神霊を招くシャーマンの職能をもつとともに、医者・学者、神像を描く画家、古楽を演奏、神舞を舞う芸能者でもあり、家普請の折の大工の棟梁でもあった。納西族の民族文化の中心に東巴の存在があり、その知識が象形文字、東巴文字により伝えられてきた。しかし、現在東巴經典の読誦、儀礼の執行ができる東巴は数えるほどになってしまった。（佐野 賢治）

ご挨拶 3
大野 泰（学校法人 神奈川大学理事長）

対談 4

感性のモデル化 人類学の立場から

尾本 恵市 × 川田 順造

研究エッセイ ESSAY

2 脚の椅子が跨ぐ空間と時間

ムテサ1世のトーネット#14 12

小馬 徹

非文字資料としての日本語を考える

音訓、当て字、語源 14

山口 建治

非文字資料としての景観 16

八久保 厚志

中国図像学という迷宮 18

佐々木 睦

海外博物館事情 Foreign Museums

威厳と挑戦

大英博物館の非文字資料から広がる風景 20

大西 万知子

フィールドノート Field Note

中国雲南省麗江調査記 東巴文化の今昔

1 東巴經典と現代に伝わる原初的な紙製法 22

田上 繁

2 世界常民 雲南省で考える 23

中村 政則

3 麗江と大理の狭間で考えたこと 24

的場 昭弘

4 “観光”という情報発信 25

佐野 賢治

受贈資料一覧 27

主な研究活動 29

研究担当者紹介・編集後記 他 31

Report & Information 32

神奈川大学21世紀 COEプログラムの ご挨拶

ご挨拶



学校法人 神奈川大学理事長

大野 泰

歴史民俗資料学研究科を中心とした研究プログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』が21世紀COEプログラムに採択されてから2年目を迎え、来年度に行われる中間評価に向けて精力的に調査・研究が進められていることは大変喜ばしく、拠点リーダーをはじめとするこのプログラムに携わる各位の活躍に深く敬意を表するものである。

最近の受験生が大学を選ぶ際「動いている大学」が基準の一つとなっているという話を聞いた。「動いている大学」というのは漠然としているが、具体的には社会や受験生のニーズに的確に対応した取り組みを展開している、元気の良い大学ということなのではないかということである。「動いている」元気の良い大学の中にいれば、自らも有意義な大学生活を送ることができるだろうと期待しての選択だとすれば、その「動き」は一つのことで足りるのではなく、大学生活の中で経験するであろう全てのことについて求めているのではないか。つまり、自らが4年間過ごすキャンパスの施設・設備や環境、仲間たちとの課外活動、そして、自分が専攻する授業の内容や研究の一端など、大学生活についての具体的なイメージを抱くことができる様々な情報が広く伝わっていくことが必要である。

神奈川大学における「研究の動き」を広く社会に伝えるという意味から、この『人類文化研究のための非文字資料の体系化』が果たす役割は非常に大きく、法人としても十分なバックアップが必要であると考えている。なぜなら、このCOEプログラムは文部科学省からの支援が終了した後も、世界最高水準の研究教育拠点として研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図ることが求められており、永続的に研究教育活動を進め、情報・成果を発信していくことが求められているからである。さらに、この研究テーマそのものが、永続的な研究教育活動によって成果を生み出すにふさわしいものであることも忘れてはならない。昔の絵に依って生活の様子や遊びの世界などが伝えられてきたように、現在も映像が我々の生活を伝えたり、学びの場で活用されたりしている。文字の世界と非文字の世界とが協調しながら文化を伝え、その結果さらに成熟していくことを想うと、この研究は、過去から現代までの永いつながりの中に光を当て、過去の文化を現在に生かすことができる意義深いものであることを確信する。

日本から発信する世界の拠点でありつづける大きな責任を負っているわけだが、教育・研究による社会貢献を求められている大学にとっては、成果を広くアピールすることができる、またとない機会を与えられているということも言えるだろう。この研究が大きな成果をあげ、今後の神奈川大学にとってかけがえのない財産となることを期待している。



対 談

尾本 恵市

東京大学・名誉教授
国際日本文化研究センター・名誉教授

×

川田 順造

神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・教授

感性のモデル化 人類学の立場から

クラスター分析と徴候分析

川田 尾本さんは、文化をもった動物としてのヒトという観点から、文化人類学と自然人類学の統合を説いておられ、私も“文化は文化より”という文化至上主義の解釈に反対で、ヒトの生物としての基盤が、文化の形成にとって重要だと考えています。私も尾本さんと同じ生物系(理科 類)出身で、学部、大学院でも同世代の総合人類学の学問環境で育ち、新エイブ会の構想にも賛成です(1)。COEで私の属している第2班の中心課題は身体技法と感性の資料化で、この領域でこそまさに文化の生物的基盤が問われるのです。身体技法は私の長年の関心で、すでに龐大といってよい研究データの蓄積があり、海外での発表も多くしてきましたし、自然人類学との協同という点でも、自然人類学の学会や学会誌での発表、COEの共同研究員もお願いしている芦澤玖美さんなど、キネシオロジー(生体運動学)の専門家とのアフリカや日本での共同調査もしてきました。感性の領域で、聴覚に関しては音文化(sound culture)という概念を私は提唱して、言語と音楽、声と器音などの境界を取り払って、音のコミュニケーションの総体の社会・文化的な意味や聴覚以外の視覚・触覚などとの共感覚(synesthesia)の問題を追求し、COE以前に多くの成果を内外で発表しています。けれどもそれ以外の感性の文化において重要な領域に、嗅覚や味覚があり、COEの研究課題として探求が始まったところです。

日本の香道には前から興味をもっていましたし、匂い

が喚起するものについてのテストを、調香師の使うサンプルで、日本やアフリカの被験者に試みたこともあります。匂いの喚起力は強烈だが、非分節的で、個人差や状況による変差がきわめて大きい。それを集合的な“文化”の問題としてどのように取り上げていったらいいか、その方法で迷うところが多く、この機会に尾本さんにご意見を伺いたいです。

一つは社会史的なアプローチで、フランスのアラン・コルバンやジョルジュ・ヴィガレロなどの先駆的な業績があります。都市の悪臭とか人体の潔不潔への対応の問題として、歴史的に研究する方向です。これら先人の研究を批判的に検討し、それと比較できる形で日本やアフリカなど、他の社会について探求することも可能でしょう。ただ社会史的研究は、ある社会のある時代の嗅覚の特殊な側面を対象にしているので、それらの研究で問題になり得たことが、他の社会では存在しないこともあり、広く人類文化について比較できるとは限らないといえます。第二の方法は、ある文化のもつ匂いの認識世界をモデル(最頻的)な形で把握しようとするもので、認知人類学の一分野ということになるでしょう。匂いのサンプルを一文化ごとにある数の被験者に嗅いで分類してもらい、結果をクラスター分析して、その文化の嗅覚認知の特徴を把握する。これは認知人類学で色彩についても行われた方法です。ただ、匂いのような不安定な事象で、母集団に対して被験者のサンプル数も少なく年齢・職業にもばらつきがある場合、そこから何か有効な結果が導

き出せるだろうか、クラスター分析というデータ処理の手法に関しては精密らしい装いはしていますが、そこにかえって陥穽がありはしないか、認知人類学の研究者とはこれまでも接触が多かったのですが、クラスター分析を匂いの領域に適用することには、私は疑問をもってしまうのです。

文化とパーソナリティ研究がまだ流行していた1961年、私は人類学の院生でしたが、岩手県の農村でTATとかロールシャッハなどのプロジェクトヴ・テストによって、村のモーダル・パーソナリティ、つまり集団の最頻的パーソナリティを求めようとした、その領域の最先端の専門家二人の指導した調査に参加したことがあります。プロジェクトヴ・メソッドは臨床的には有効だと思いますが、集団の最頻的パーソナリティを求めるのには無理があると感じました。その試みは完全に失敗したのですが、比較的少数の個人のテスト結果のクラスター分析から、匂いの認知についての集団のモーダルな性格を求めようとする方法とも共通する問題を含んでいると思います。こうした方法の有効性について、人類遺伝学分野でクラスター分析をお使いになった尾本さんに、意見を伺いたいです。

尾本 私どものやっているクラスター分析では、はっきりと尺度の定義がなされています。まず遺伝子の違いを集団間で測る「遺伝距離」が、集団遺伝学で定義されているわけで、それに基づいてクラスター分析をしている。ですから、それぞれの枝の長さとか、分岐年代の推定には理論的な根拠があるわけです。ところが、今うかがった、においに関する測定値を仮にクラスター分析する場合、数値分類ですから当然いくらでも出来るわけです。しかし、尺度の単位、原理がはっきりしないものでいくら分類してみても、それは単なる機械的な分類に過ぎないわけで、科学的な意味はないのではないかと。

その意味では、私は川田さんの「文化の三角測量」のように、日本とフランスとアフリカという三つの地域集団で、さまざまな現象を比較していく方がむしろ実りが大きいのではないかと思います。

川田 私も第三の方法として、徴候分析(symptomatic analysis)とでもいうか、感性の領域でも、ある文化の例えば匂いのとらえ方を集約して示している、「徴候」とみなせるような事象の掘り下げが有効ではないかと考えています。研究者の主観に片寄らないために、その事象

をその文化内の他の側面との関係で検討して意味の位置づけをした上で、私の提唱してきた文化の三角測量という、断絶のなかの原理的な比較から理念型としてのモデルを作って行くという方法を模索しています。まだあくまで模索の段階に過ぎませんが。

日本では香道をはじめ焚香が好まれたのに、体に塗る香料は明治以前にはなく、フランスでは煙よりも体に塗る香水が発達した。西アフリカでは、アカテツ科の野生樹でバターの木とも呼ばれる「カリテ」(*Butyrospermum paradoxum subsp. parkii* (G.DON) HEPPEL)の種子からとるシア・バターなどの植物油を全身に塗る一方、催淫効果をねらった焚香が盛んです。なぜそうなったのかを、その事象をめぐる言語表現や慣行、俗信などを手がかりに文化内の、イーミックに分析し、同時に他の二文化との対比で、文化間的、エティックに対応やねじれを考えて、それぞれのモデルを作っては壊してみるという試行錯誤が大事だと思います。私が「技術文化」(technological culture)について行ったように(2)日本、フランス、アフリカなどという固有名詞はつけず、モデルAとかモデルB、Cなどとした「発見に資する(heuristic)」理念型を作って、それをもとに他の文化についても特徴を見てゆく。もちろんA、B、C以外にもD、E、Fもあるだろうし、A、B、CのサブタイプとしてA1、A2、A3というのものもあるかもしれません。そういう、文化を徴候から分析していく上での手がかりとしては、匂いとか味の領域は、難しいが豊饒な領域ではないかと思うのです。

味覚を中心に、嗅覚、視覚も含まれる領域として、フランスのブドウ酒の評価法に私は興味があります。その大きな特徴は、明確な定義を伴った言語化が進められていることです。商品としての国際的な流通の歴史が非常に古いために、言語で味の評価を明確に規定する必要があったのでしょう。グラスに注ぐ時の音など聴覚まで含めた総合評価がありますが、ソムリエの国際コンクールで日本人が一所懸命に勉強して一位になったりもできるのは、ブドウ酒をめぐる感性の領域における評定が、言語化された一つの体系になっているからです。

尾本 クラスター分析とは別に、統計学でよく使う方法として、主成分分析があります。例えば、形態学には私が言ったような意味での遺伝距離はありません。人骨を測ってクラスター分析をしています。あれには実をいうと相当問題があります。尺度の根拠がない、単なる量



対談

に過ぎないわけです。主成分分析では、わかりやすく言えば、頭の長さや幅を縦軸と横軸にとり、サンプルの相対的な位置を二次平面の上で示すのです。これは直感とも一致します。よくコーヒーの味で、甘み・苦み・酸っぱさの程度を三角形の中で分析して、モカならこの産地だとか、コロンビアならここだとか特定しているが、あれに似ています。何か基準になるもの、三角形でもいいし、縦軸・横軸でもいいし、恣意的ではいけません、そういう二次平面の上にスポットしていく方法がむしろ役に立つのではないかと思います。

匂いの文化

川田 南フランスの中世都市グラスは世界の香水の一大中心地で、有名な調香師のラボが集まっているところです。そこでミシェル・ルントニツカという親の代からの世界的な調香師で、視覚の領域などとの共感覚の試みにも挑戦している、いま注目されている調香師のラボを訪ねてお話を聞きました。調香師の親に訓練されて育ったルントニツカさんは、三千くらいの匂いを嗅ぎ分けられるそうです。彼に言わせるとこれは訓練の問題であって、音とか色については皆小学校から教育を受けるが、匂いについての教育は何もない。調香師の学校で訓練すれば誰でも二千ぐらいい嗅ぎ分けられるようになると思います。感性というのは訓練と結びついている面があるのかもしれない。ルントニツカさんのお話で興味深かったのは、共感覚、領域の違う感覚の結びつきです。三千という匂いをどうやってマークするのかと聞きましたら、自分の過去の体験のなかの特定の風景の記憶と結びつけ



川田 順造

神奈川県立歴史民俗資料学研究所・教授

てしるしづけるのだそうです。

日本の芝居の下座囃子に、大太鼓の雪音というのがあります。ばちに布をまいて雪がどんどん降ってくる場面で、鈍い音をドンドン、ドンドンとゆるく打つ。雪が降るのに音はしませんが、舞台上に雪が降る情景の視覚的印象が音で補われる。日本の風鈴も音を聞いて涼しくなろうという装置ですが、異なる感覚領域のあいだの連合は、いろいろな面に表れています。

最近フランスの香水業界で、緑茶の匂いが流行しています。それと日本人にとってはノスタルジックなご飯の炊ける甘い匂いも。慣れ親しんだものへの安心感のある愛着と、変わったものの刺激を求める好奇の両側面は、味覚や聴覚においてもですが、感性の領域で常に背中合わせになっていると思います。

尾本 フランスでは香水を体につけ、日本では香をたく。そこにははっきりした原因がある。いわゆる体臭は、明らかにヨーロッパ人種は強いわけで、彼らは体臭を消すということに懸命です。それに対して日本人は体臭がない。東北アジア人は体臭がないのです。ところが、鮎など魚を焼いたりするから部屋が臭い。においというものは、本人は気づかないですが、外から入ってきた人にはわかる。においの文化というのは、自分のためではなく他人を迎えるためのものなのです。お客さんに不愉快な思いをさせないためなのです。これは合理的な一種の文化適応だと思います。

川田 昔パリの屋根裏部屋で自炊していた時、出窓で鰯を焼いたらすごい苦情が出た(笑) 日本では焼鳥屋や鰻屋は、煙と匂いで客を引き寄せるといいますが。

尾本 焼くのは、多分風通しのいいところで焼くのだからうけど、焼かなくてもなんとなく日本の家は臭いのです。トイレも汲み取り式だったから。香も元はトイレのにおい消しと思ったのですけどね。においを科学的に測定して、数値で表すとなるとなかなか難しい。

川田 感性の領域で重要だと思うのは、反射的な忌避感覚、とっさに何を気持ち悪いと思うかです。日本人は風呂に家族が交代で入るのは平気だけど、西洋人には出来ない。日本人は西洋式の個人浴槽で自分の体を洗い、そのまま拭いてあがるのは気持ち悪いと思う。どちらがキタナイかというのは文化的な判断で、どちらの方が黴菌が多いかという問題ではありません。スリッパも同様で、廊下は歩くけれど畳の上にあがると気持ち悪いと思

う。まして、布団、とくに寝具の布団に上がるなんてとんでもないと思う。けれども裸足とか足袋で廊下を歩き、布団が上がっても汚いとは思わない。明治以降導入されたスリッパが、それ以前にはなかった住生活の床面の区別に対応するものとして、日本人の潔不潔感に新しい局面を生み出し、どこの家にも何足も置いてあるという、日本にしか見られない異様な発達をしたわけです。

尾本 履物ということで、土足という概念になってしまう。私の家でも、トイレのスリッパを履いてそこら辺を歩いていると、家内にもすごく怒られますね(笑)

川田 完全に土足というわけでもなく、中間土足。病院とか学校の上履きなど。家によっては、台所やトイレに入るとまた別のスリッパに履き替えたりする。

リズム感 生まれか育ちか

川田 遺伝子レベルの問題かどうかで興味があるのは、リズム感覚です。これは文化だけの問題ではないのではありませんか。ブラジルで感じたのですが、インディオは我々と祖先が共通のせいか二拍子系の踊りで、私でも楽に踊りの輪に入れます。けれども、アフロ系のダンスとなるとポリリズムで、これは生まれ直さないとだめだという気持ちになる。アフリカで小さい子どもが二、三人で空き缶を棒で叩いて遊んでいても、申し合わせた訳でもないだろうに、絶対に同じリズムでは叩かない。それぞれに違うリズムをからみ合わせて楽しむ。そのポリリズム感覚は、我々二拍子系ヤマト民族から見ると高級なものに



ヨルバの村オキニ(ナイジェリア)で
1989年11月、川田撮影

思えますが、アフリカの子どもたちにしてみれば、ポリリズムが基本というか、当たり前のもなのかも知れません。赤ん坊の時母親の背中であるいは胎内でリズムを覚えるのだとアフリカの人たち



尾本 恵市

東京大学・名誉教授
国際日本文化研究センター・名誉教授

は言います。

尾本 多分遺伝的な脳の運動分野の問題、運動と音との関連です。リズム感覚が、脳の中のどこかで発達している人と、そうでない人がいる。脳の問題になると、生まれか育ちか、natureかnurtureか非常に難しい。遺伝子でなくても、母親の胎内にいる時に刷り込まれたのかも知れない。ローレンツが言うとおり、幼児期のある非常に敏感な時期に、ある外界の刺激が入ると、遺伝子がすでに存在していなければ駄目ですが、リズム感覚が開発される。

川田 小島美子さんは、日本で水田稲作民的生活様式が、強弱感のない二拍子を基本とするリズムを規定してきた一方で、沖縄の波乗りリズムのように、一拍ごとに上下にスウィングする海洋民のリズムや、津軽三味線のような、東北の山地狩猟焼畑民の強くはずむビート感をもったリズム、これに騎馬の習慣が加わった、強弱二拍子のためと弾みをもったリズムが認められることを指摘していますね。基本的生業・生活形態がリズム感を規定するというのは、藤井知昭さん、故小泉文夫さんの騎馬民族三拍子説もそうです。堀内勝さんは、アラブのリズムは駱駝の歩き方のリズムが基本だという立場で、面白い分析をしています。ただ、馬も駱駝も家畜ですから、人間の側からの影響も強いはずですよ。

尾本 子供の時の刺激ですよ。実際に子供の周辺でどういふ音が鳴っているかは測定できるわけです。川田さんの三角測量、日本とフランスと西アフリカというのは、場所がとてもいいと思う。それぞれ場所が独特だね。中



対談

国、インドはどうだとか言い出すときりがありません。川田さんの三角測量というのは一つの突破口を開いたと高く評価しています。2点では駄目で3点というのがポイントだと思います。

身体技法の背景

川田 身体技法、文化によって条件付けられた身体の使い方について、アフリカと日本でキネシオロジーの人たちと共同研究をしてきましたが、この領域はまさに自然人類学と文化人類学の接点です。報告書が出たばかりの芦澤さんを代表者とする国内科研では、日本の伝統的な生業に結びついた身体技法として、山の傾斜地での荷物の背負い方、舟の櫓こぎ、田圃での前屈作業の三つを取り上げました。山仕事、沿岸・近海漁業、水田稲作は日本人の基本的な生業でした。櫓こぎは腕力はあまり必要とせず、腰を使う。背負い運搬具については、地方差もあり簡単に言えませんが、肩や腕に力点のある西洋に比べれば腰で支える。これらは胴長で四肢の短い日本人の体形に合った身体の使い方ですが、稲作の前屈作業は、日本人には不向きな姿勢だと思います。

以前、アフリカで水田の草取りのビデオを撮ったことがあります。日本だと少しやったら腰を伸ばしてやれやれとなりますが、深前屈が日常の身体技法としても楽な姿勢である西アフリカ女性の共同労働では、皆楽しそうに歌を歌ったり大声でおしゃべりをしながら、深前屈のまま全然起き上がらないのに驚きました。寒冷地の東北から北海道まで新田開発をやり、前屈が重要な水田の作業は日本人の体に不向きだったのに、無理をして日本人が米に執着してきたのはなぜだろうかと改めて思います。尾本 無理を強いてというのは、他にもある。僕が一つ注目しているのは頭上運搬です。縄文時代には間違いなくあったはずですが。今でも沖縄に行くとやっています。大原女が頭の上に載せているのはありますが、なぜ、あの頭上運搬が日本の主流ではなくなったか疑問です。川田 フランスでも田舎では随分あったけど、今はなくなりました。

尾本 背負子というものが出来てから、頭上運搬をやる必要がなくなったのではないのですか？

川田 頭上運搬が今もさかんなアフリカには背負子はありません。日本でも背負子の型は、東西で分かれます。西では、重心が非常に低いのです。ヨーロッパでは背負い

具は重心が高く作られていて、首の後ろと肩で荷の重みを支える。日本では腰、仙骨で支える。ところが、東北のとくに山地では背負い具の重心が上にいく傾向があります。初磨り臼も、第二班の河野通明さんが詳しい調査をされてCOEの年報にも書いておられますが、西日本では低くて低座位で摺るのですが、東北では高く、立って操作する。単なる地域差ではなく、古い時代からの住民の系譜や体形の違いとの関係も考えなければなりません。私も前にビデオでとったことのある、岩手県北の山地の踏み鋤とアイヌの踏み鋤はよく似ています。一本の木の幹と枝で出来ていて、独特の体の使い方をします。尾本 踏み鋤が縄文時代の遺跡から出てくると面白いですね。縄文時代の木材で用途がわからないものがたくさんある。人類学では、いろいろな雑学が役に立つのです。川田 これも徴候的なものですが、日本では本腰を入れて仕事にかかると言いますが、フランス語では「腕まくりをする」(retrousser ses manches)、英語でもroll up one's sleeveと言うのです。また、「あぐら胡坐をかく」を、フランス語では「仕立屋風に座る」(s'asseoir en tailleur)と言いますが、英語でもそうです(to sit in tailor's fashion)。19世紀前半の北斎漫画にある諸職図では、みな尻を地面か床面につけて作業している。同時代のフランスのエピナール民衆版画の諸職図では、職人の作業姿勢は、立つか、高い座位です。ただ、仕立屋だけは胡坐をかいて仕事をしていて、胡坐が職業と結びついている。高麗・李朝の朝鮮ではヤンバン(両班)坐りとも言ったそうです。特権の官吏の文机に向かったライフスタイルと結びついていたのでしょう。胡坐は勿論服装とも関係があって、インドでは、女性でも裳裾が長いから胡坐をかきますね。

尾本 腰はおもしろいですね。腰が90度曲がるのは、刷り込みじゃなく遺伝的なものではないでしょうか。

人類進化と言語の関係

川田 言語くらい、ヒトの文化にとって基本的重要性をもつものでありながら、生物的な身体や身体技法と結びついたものはないでしょう。発声器官と構音器官の協働によって、声の合図ではない分節的な発音が可能になる。進化の過程で直立二足歩行で喉頭が下り、構音器官が発達したといわれます。ヘッケルの「個体発生は系統発生を短縮して示す」という言葉は有名ですが、人間の赤ん坊が

生後一年くらいで直立二足歩行をするようになると、分節的な言葉を話すようになる。これは声帯が下がり、構音器官が発達してくることに関係がある。それまではマンマなど両唇音だけです。霊長類研究所の松沢哲郎さんにいただいた論文で学んだのですが、チンパンジーの幼児期にも、喉頭の降下が見られ、この降下はhomonidに固有の進化の結果ではなく、一部はhominoidの進化過程にも含まれているのではないかと考えられるそうです。チンパンジーと人間とのコミュニケーションは、かなりの程度可能だけれど、チンパンジーには二重分節的な言語は話せない。

尾本 確かに声帯が下がると、持続しているいろいろな種類の音が出せるようになります。猿やチンパンジーでは、叫び声です。それに対してヒトの場合では、例えば、あゝ、長く母音を伸ばして、口全体が共鳴して発音します。ただ、分節化とは要するに、概念を繋げている複雑な表現をすることです。音声学的な問題よりもむしろ思考形態の変化の方が重要ではないかと思えます。赤ちゃんが立って歩くようになると、キャッキヤ、キャッキヤ言っているのに比べて、ちゃんと言葉が出せるということです。差別的にとられても困るのですが、聾啞の人の赤ちゃん、つまり全然声が聞こえない人の子の言語の発達は今どのように考えられているのですか、やはり手話で教えるのですか？

川田 ヘレン・ケラーの例もありますからね。

尾本 今までの言語発達理論というのはいわゆる音声伝達ということに縛られすぎた。耳の聞こえない子供も手話で概念を複雑に繋げていけるということが大事だと思うのです。声帯は関係ないですよ。

川田 以前パリであった霊長類の国際学会で、ガードナー夫妻がチンパンジーとコミュニケーションする実験の記録映画を見たことがあります。ですが、あれはチンパンジーに人間の側から伝達方法を仕込んでいるだけで、曲芸ではないかと思ったのです。

尾本 チンパンジーの場合は同じ曲芸でも程度がすごいのです。チンパンジーに言語を教えることで古典的に有名なのはガードナーとプリマックです。チンパンジーのワッシュとサラは女の子です。松沢さんのアイちゃんも女の子でしょう。あのようなシンボリックな考えかたは、女性の方が発達しているのではないかと思います。チン

パンジーの文化が話題になりますが、私は、概念化思考に基づいた言語と、言語に基づいた概念化思考というヒトを特徴付ける文化は切っても切り離せないと思います。

500万年の人類進化のなかで、概念化思考とか、価値判断が明確に文化の基盤になったのは、比較的最近ではないかと思うのです。いわゆるホモ・サピエンスになってからではないか。言語があったかどうかと言えば、それは確かにあった。同じかたちの石器などをみんなが作ることは、当然ある抽象化された概念を共有しているからです。言語がなければ考えられません。ホモ・サピエンスの段階になってから言語はすごく複雑化したのではないかと考えられる。

一つ言えるのは、言語という問題は遺伝子と違って、一種の文化です。能力は遺伝ですが、言語そのものは文化です。石器や習慣の多様性がある以上、言語にも多様性を認めてもよい。極端な話、ニューギニアの高地へ行くと、明らかに生物学的には同じヒトたちのあいだで全然言葉が通じません。遺伝子の分化は何万年経たないと起こりませんが、言語は数百年で起こる。

川田 言語能力は先天的だが、ある言語の習得と運用は完全に後天的な学習によるものですね。各言語に固有の、調音器官のコーディネーションと運動連鎖の総体である調音基底という身体技法を通じて発話できるわけですから、調音基底の刷り込みがないと、その言語の発音がスムーズに出来ないということになる。

尾本 まさに言語というのは、親や周りがしゃべっているのを聞いて覚えていくわけです。年取ってからでは駄目で、子供のある一時期に刷り込みと同じように、いろんな言葉がどんどん入ってくる。文字のある文明とない文明とがある。それは、言語に相当、影響しますか？

川田 尾本さんの定義だと、文明と文字は結びついている。中国では漢字が共通しますが、話したら全然通じない方言がたくさんある。日本語もそうですが、文字を習うと言語は画一化に向かうのです。『サバンナの音の世界』という私が録音編集したレコードアルバム（後にカセット・ブック）に、子どもたちの歌とかお話も入っています。何人もの人がそれを聞いて、声がきれいだと感心した。文字教育によって規格化されていない言葉は、生き生きと、アナーキーな個性に輝いています。その代わり共通語としての通用性は低い。これが画一化していくと、NHKのアナウンサーのような話し方になるわけです。



対談

尾本 アイヌ語も文字がないから、北海道でも方言がたくさんある。記録に残っているアイヌ語というのは一つしかありませんが、ユーカラもお互いに全部通じるのですかね、旭川とか、場所によってどうなのでしょう？

川田 「通じる」ということの意味が問題ですが、節をつけたり拍律を整えた語り物は、日常言語ではばらばらな言葉の韻律的特徴が様式化されて、丸暗記しやすくなり、文字化されたテキストに近い性質をもってくるということがあります。歌の特徴の一つは、言葉の意味がわからなくても歌えることです。また歌われる文句や様式化された語りは、細部の意味の理解・不理解を超えて聞き手に受け入れられる面がある。旅の贅女さんの歌や琵琶法師の語りなどもそうです。

尾本 言語と音楽の中間的な問題として、歌の問題があります。フィリピンの先住民の例ですと、自分たちが神様の山だと思っている山に向かって、「なんでそんなことをして、みんなを困らせるんですか」と大きな声で朗読する、呼びかけるわけです。一種の節をつけて、朗々たる声で。実は僕はそれを、案外スペイン統治時代あたりにやっていたのを真似しているのではないかと思ったのですが、もともとオリジナルなものでしょうか？

川田 外部世界との関係での歌という点で、西アフリカは興味深いところです。地中海世界と繋がるサハラ砂漠、そこはイスラーム・アラブとの接触の場であり、真ん中がサバンナ、南に行くと海岸の森林地帯で、ギニア湾、大西洋を経てヨーロッパと15世紀半ばから交渉があった。北のサハラやその南縁のサバンナでは、アラブ世界に特徴的なメリスマ唱法、つまり言語音の1モーラに3つか4つの異なる高さの音をあてる。グレゴリオ聖歌やイスラームのジクルでもそうです。けれども少し南のモシ社会にはメリスマ唱法はありません。そして声の高さの複合ということに関してはユニゾンなのです。ところが南の海岸へ行くと、ポリフォニック、多声になります。海岸地帯も東のナイジェリア東部の方へ行くと、雑然としたトーン・クラスターからポリフォニー、異なる高さの声を調和的に組み合わせるものにだんだん変わってゆく。椅子文化の発達、ベニン王国の平面青銅板図像のような二次元表象の存在などと共に、ヨーロッパとの接触による影響の可能性を、感性の領域で複合的に検討してゆく必要があると思います。

尾本 中国の少数民族の間には有名な歌垣があります。

恋人同士が歌を大きな声で歌います。場所が大体山岳地帯です。声を通り、遠くまで聞こえます。だから多分、サバンナとかでは、出来ないのではないかと？遠くにいる誰かに何か伝えたいというのが、言語の一つの重要な役割だったと思うのです。

川田 裏声もそうですね。ハワイの洋上島社会の裏声、アルプスの山のヨーデル、中部アフリカの森林住民の裏声。日本人の伝統的な発声も、男も甲高い。馬追い歌とか木遣い歌は、山林にこだまする大きな甲高い声です。

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」について

尾本 従来人類学だと二足直立歩行などサルから進化してきた全ての現象が大事ですが、私が主張するヒト学というのは、現代文明下でのホモサピエンスという動物、これが独特の存在であるということから出発します。ですから、現代のさまざまな問題との接点を絶えず認識する。K.ローレンツの『文明化した人類の八つの大罪』や、萱野茂さんの「アイヌは、自然の利子で食べさせてもらっていた。そこに、和人がやってきて、元本を食い尽くしてしまった」というのはよい比喻です。

文明化した人類の八つの大罪 (K.ローレンツ・1973)

- 1 人口過剰...社会的接触の過多から攻撃性がたかまる
- 2 自然破壊...資源の枯渇、自然に対する畏敬の念の喪失
- 3 競争の激化...競争手段としての技術の発達、国家はあたかも異なる生物種のように殺し合う
- 4 感性・情熱の萎縮...科学技術の過大な進歩によって虚弱化
- 5 遺伝的衰弱...自然淘汰の消滅による
- 6 伝統の破壊...急激な価値判断の変化、世代間の対立
- 7 教化...教育・マスコミによって画一化
- 8 軍拡・核兵器

川田 人類という視野が大切だと思うのは、自分たちの生活や文化の中だけで考えていて当たり前だ、あるいは、特殊だと思っていることが、相対化されるということです。それから生物の一つの種としての人間という観点、種間的 (inter-specific) な位置付けで人類の問題を考えたい。音文化や身体技法を取り上げる時も、文化的 (intra-cultural) の対極に種間的を私は考えています。音文化で言えば、音とそれが表す意味との関係が重要な

切り口になります。私がよく使う八角形の一番右端に置く種間的な声というのは、生物の根源的な欲求である個体の存続と種の存続にとっての危機に発する、断末魔の叫びとか同様に警戒を呼びかける声、これは、種が異なってもかなりの程度音の意味が分かり合える。それに対して、歓びの表現であるとか、擬音語・擬声語とかになると、音と意味の関係が動機付けられている度合いが大きいです。種内の(inter-specific)、つまりヒトであれば文化が異なっても分かり合え文化間的(intra-cultural)になり、最後に音とそれの表す意味の関係が、恣意的つまり文化内的(intra-cultural)な約束に基づいている領域になるわけです。

他の種との関係で、ヒトの立場を考えると、アンソロポ・セントリズム、ヒト中心主義は考え直されなければなりません。神が自分の姿に似せて人間を作り、他の動物を人間の役に立てるようにお作りになったという、創世記パラダイムと私が呼んでいる世界観が西洋には根本にあって、それにテクノロジーが結びつき、近代ヒューマニズムが生まれた。この近代ヒューマニズムが、いま危機に瀕している。

尾本 ご承知のように、ギリシアの昔から、「ニワトリが先か卵が先か」という議論があります。プルタルコスっていう人が紀元1~2世紀に『食卓談義』という本の中に書いています。彼らは食事しながら雑談として、現代生物学の重要な問題を議論したわけですから、恐るべき文化程度ですね。現在の遺伝学で言うと、ニワトリは「個体」で、卵は「遺伝子」です。生物は形質と情報から成っている。個体は計ったりすることができる。つまり形質です。ところが、遺伝子は情報です。設計図という言い方をしますが、設計図というと、みなさん何かこう、紙が一枚あるような気がするみたいですが(笑)これは情報です。遺伝子(DNA)を情報として捉えることができるようになったのが、1953年のワトソン・クリック以降です。

遺伝子は、自然が決めたものだから、そう簡単には変えられない。しかし、我々が直面するさまざまな問題、例えば、差別の問題は、文化があるから出てくるわけです。遺伝子には差別はない。人間が文化というものから離れられない存在である以上、気をつけないと偏見や差別から免れる事ができないということです。最近でした

「先住民族と人権」という論文に書きましたが、区別と偏見と差別を、私ははっきり使いわけています。DNA分析から出発して、文化というものを見る場合、まずそこで区別・偏見・差別という言葉で、自分なりにきちんと理解しておかないと先に進めないのです。区別イコール差別だという議論がありますからね。男女を区別することも差別だということになってしまうと、自然科学はなりたたなくなってしまう、結局文化・社会科学との連携もできなくなります。

今回のCOEのテーマはまったく新鮮でそのこと自体が非常に大事なことです。日本の社会科学、文化科学を世界の中で捉える、全人類という立場で捉えるということは、非常によいと思うのです。問題は自然科学との連携です。クラスター分析のことで出てきたように、表現法が問題です。自然科学ではおのずと尺度が決まっている遺伝子のような場合、表現法もおのずから決まってくるのです。ところが文化のほうは、まだ本当に科学的に誰にでも納得させられるという表現法が、少ないような気がするのです。

川田 問題意識がなければ、山のように資料があっても紙屑にすぎない。問題意識をもち、問題を立てて、初めてそこから体系化も芽生えてくる。「人類文化」という視野は広大で現実離れしているようですけれども、現実の問題に対して近視眼的でない見通しをもち、未来を考えて行く上で大切です。ただ、そうあるためには、日々我々の社会におこっていることに注意を払い、問題を考える姿勢が必要です。中世史学者マルク・ブロックが、歴史学者はたとえ中世を研究していても、現代社会に起きていることに生き生きとした関心を持たなくてはならないと言っているのに心から共感します。それは人類学者でも同じで、社会との関係はなによりも私の学問を通してですが、同時に、自由な論調で知られる『信濃毎日新聞』の時評コラムの定期執筆者としても、イラク戦争や靖国問題も含む現代の問題に発言することを通して、ささやかでも現実にコミットしてゆきたいと願っています。

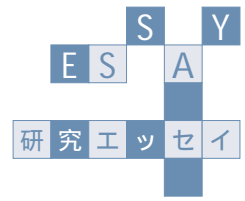
(1) 尾本恵市・川田順造・佐原眞(鼎談)「総合の「学」をめざして：新エイブ会の提唱」、『創造の世界』1997年秋号、No.104、小学館：82~109頁

(2) J.KAWADA *The Local and the Global in Technology*, UNESCO World Culture Report Unit, Paris, 2000.



2脚の椅子が跨ぐ空間と時間

ムテサ1世のトーネット#14



小馬 徹 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授)

1 文化のアポリアとプロクセミックス

ポストモダン、ポストコロニアルの人類学では、文化とは、外部の視線に媒介された反省的な視角から操作対象として「創造」されるものである。この強く構成主義的な文化観には、文化の政治性を白日の下にさらけ出した大きな功績がある。その一方で、浅薄な追随者を増長させた。人間性の根底にある捉えがたい何ものかを見つめて、それを文化の概念で捉えようとする深遠な試みをも一緒にたに拵じ伏せる、暴力性を併せもつのだ。

N. チョムスキーの偉大さは、単に唯一の超大国の暴挙を告発して止まない点にあるのではない。むしろ学問上の巨大な貢献は、表層的な文化の政治性を超えて、ヒトが種として共有する本質主義的な文化が存在すると、臆さず、怯まず論じてきた点にある。言語能力は遺伝的な本質としてのヒトの文化であり、構成主義的な文化とはその次の個々の文化の水準の選択の問題である。構成主義論者は議論の水準を取り違えて全てを政治に帰す。

こうした文化のアポリアと格闘した先駆的な研究として、E. T. ホールの「相対的な近さの学」(proxemics)を再評価してみたい。彼は、(表層の)構成主義的な文化を同一の枠組みと尺度で把握・比較できるような、「文化モデル」を作ろうとしたのだ。彼が逆説的に目指したのは、『文化を超えて』本質的な文化を把握することだったろう。ただし言語そのもの(有節言語)ではなく、「沈黙の言葉」あるいは「行動の言語」としての。

彼は、或る相手との距離の取り方や時間の処理の仕方が、言葉の裏側や意識下に隠された感情を表現していると考えて、豊富な事例を挙げ、実際的で説得的な議論を繰り広げた。互いに会話相手との適切な距離を保とうとして、学舎の40mもの廊下を端から端まで我知らず移動していた南北両アメリカ出身の2人の教授。問合いのとり方の文化的な違いから、水臭さ(前者)と馴れ馴れしさ(後者)を克服しようとして、という具合に。

ただし、或る関係において何かと関わる距離や時間を調整されるのは、なにも人だけではない。物もまたそう

である。そこで仮りに、物にもプロクセミックスを当てはめてみるとどうなるか。やはり、物を或る時或る所に置いた行為者の意識下の感情や隠れた心の動きが、文化と歴史の問題として見えてくるのではないか。それが、小稿のちっぽけな問題提起である。

この視点からは、特定の個物をそれが置かれている具体的な個別状況(空間と時間)から切り離して単に或る種類の物(の内の任意の一個)として捉え、その一般的な機能や制作技術、用途、使用技術を論じる民具学とは大きく異なった展望が開けてこよう。ここでは、考察の対象は物の用具性ではなく、特定の脈絡で特定の個物が担う(意識下の)表意性、または象徴性となる。実は、或る物との退っぴきならぬ一つの出会いの衝撃の余韻の中で、この小文を綴っている次第。出会ったのは2脚の椅子、場所はカンパラ。2003年8月11日のことである。

2 王はトーネット 14に腰掛けたか?

ウガンダの首都カンパラは、ヴィクトリア湖岸の美しい高原都市で、ローマと同じく七つの丘の街と呼ばれる。キリスト教各派の大聖堂、大モスク、ガンダ王宮、かつての東アフリカの最高学府マケレレ大学(当初は高校)などの歴史的な建造物が、それらの丘から街を見下ろしている。カスピ丘には、前代まで、最近4代の王の墓廟(Kasubi tombs)がある。

ムテサ1世(ca.1835~84)は1881年にカスピ丘に宮廷を開き、1884年に没して、茸の傘を伏せた形の外観をもつ壮大な草葺きの王宮(Muzibu-azaala-mpanga)の内奥に埋葬された。次いで、ムワンガ2世(在位1884~97)、チワ2世(同1897~1939)、ムテサ2世(前代、同1939~66)の後続3王が同王宮内の彼の傍らに葬られた。参拝者と墓所を槍襖が隔て、その近くの柱には4人の肖像写真(画)が、その奥にはヴィクトリア女王寄贈のランプが掲げられている。祭壇前の向って左側面の空間には、ムテサ1世のペットだったヒョウの剥製、彼が好んだボードゲーム(omweso)板と共に、あの2脚の椅子がある。

それがアンピール様式かヴィーダーマイヤー様式のものなら、何の不思議もない。だが、何と大量工業生産時代の到来を画する永遠のベストセラー、トーネット#14なのだ。なぜこの椅子が、今ここに置かれているのか？

ガンダ王国は、18世紀にアフリカ東海岸のスワヒリ商人を仲立ちとするインド洋沿岸地帯との遠隔貿易で栄え、王はその富を独占して支配を強めた。繁栄の極点がムテサ1世の治世であり、彼は最も偉大な王として記憶されている。彼は歴代の王同様に血塗れでも、スワヒリ語とアラビア語を自在に操り、卓抜な政治的才能で際立っている。太平天国の乱制圧で武名を馳せたゴードンがエジプトの2代目「赤道州」知事として1874年に南下してくると、巧妙な外交政策で籠絡して追い払った。また、イスラム教に改宗しながら（王霊も神格となる）伝統信仰を加味して臣民の反抗にあうと大粛清し、1877年にはエジプトの帝国主義的侵攻に備えて、スタンレーを介して英国からチャーチ・ミッション・ソサエティ（CMS）を招いた。だが、1879年に王の招待なしにやってきたフランス・カソリックのホワイト・ファーザーズ（WF）も容認し、CMSやイスラム教と競わせて各派の勢力を削いだ。

ムテサ1世の死後俄かに凶暴になって殺されたヒョウは彼の神性を、並の倍の珠穴があるボードゲームは才智を、両端に穂をもつ特異な槍は王権を、ランプは致富を象徴していよう。では、トーネット#14は一体何を？

3 王権の表象としての椅子の逆説

トーネット#14は、1796年ドイツに生まれ、ウィーンで成功した家具職人ミヒャエル・トーネットが1859年に生み出した永遠の傑作である。彼は、赤ブナ材を（産業革命がもたらした）熱蒸気で軟化させた後、鉄製の型（治具）に嵌めて自由自在に成形・乾燥させる曲木加工を発明した。#14は、僅か6つの部材に分解するノックダウン方式で工業的な大量生産を安価に実現した革命的な椅子（最初の「消費者の椅子」）で、現在も作り続けられ、総生産数は2億脚に達している。#14は、産業革命を建築に結実させた「水晶宮」と並ぶ記念碑的な作品だった。

カスビ墓廟のトーネット#14は、件のランプと共に1877年に英国（CMS）がムテサ1世に贈ったものだ。#14の発明の背景には、時代的な要請があった。ウィーンの人口が急増して1857年に城壁が取り壊され、跡地に環状道路と沢山の住宅が作られる。そして、大量の安価で良質の家具の需要が生まれた。狭い住居に住む新住民が憩うカフェ文化を支えたのもトーネットの曲線美だった。写

真を見ると、1911年にできた東京で最初のカフェ、プランタンの床を#14が埋めている。では、ヴィクトリア女王は、ムテサ1世を侮蔑しようとしたのか。カスビ墓廟の案内本が1877年の女王の贈り物であると誇らかに明記し、しかも#14は現に遺体の側近くにある。以下のように推論になるが、確かに王が自ら望んだのだと思われる。

探検家スピークが、1862年2月20日に王と会う。日向に立たされて待つうちに恐怖に襲われて逃げ帰った彼は、椅子を持参して座る特別の勅許を得る。一時間ほど無言で対面した後、王は立ち上がり、ライオンを模した足取りで奥へと歩み去る。この時、スピークはライフル、短銃、金時計、望遠鏡などと共に鉄製の椅子も献上した。1875年4月5日のスタンレーとの初会見で、王は（恐らくこの）鉄製の椅子を彼に勧めた。自分では座らずに。

スピークがアフリカ探検に携行した椅子は、軽く、強く、美しいトーネット#14だったろう。王はそれを欲した。東アフリカに元々玉座はなかった。背板の高い玉座についた写真が残るのはチワ2世からだ。彼の治世中に英国とウガンダ協定（1900）が結ばれ、ガンダ王国はウガンダ保護領内で最も有利な地位を得たが、実質的な権力はガンダ王から首長層に移った。皮肉なことに、聳え立つ玉座は英国の傀儡としてのガンダ王の象徴なのだ。

ムテサ1世は、必要なら屈んだ臣下の背に座った。イスラム教やキリスト教を介して近代文明を熱望した王を魅了したのは、英国が与えるお仕着せの大仰な玉座ではない。産業革命の一つの精華であり、木目に抗して美しく自在な曲線を描く新時代の椅子、トーネット#14だった。あの2脚の椅子は、七つの丘のカンパラと芸術の都ウィーンを、前近代の専制王制と大量消費の近代市民社会を跨いで、今も彼の遺骸の傍近く置かれている。

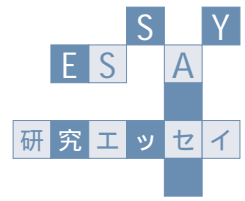


ヴィクトリア女王がムテサ1世に贈った2脚のトーネット14。カスビ墓廟内の祭壇の傍近く置かれている。



非文字資料としての日本語を考える

音訓、当て字、語源



山口 建治 (神奈川大学大学院外国語学研究科・教授)

長いあいだ中国語を教えることを仕事にしてきたせい
か、最近、どうも日本語と中国語の対応関係がいちいち
気になって仕方がない。漢字は一字だけでも単語として
機能するので表語文字であると言われる。漢字の意味に
対応する和語が固定化して和訓(単に訓ともいう)が成
立する。その訓と対立する音すなわち日本漢字音は、漢
字の原音が日本語の音韻体系のなかに反映したもの、つ
まりは日本語なまりの漢字音である。漢和辞典では音と
訓が併記されるため、音は中国伝来だが訓のほうは何と
なく日本にもともとある固有のことばであろうと思ひこ
みがちだ。ところが菊(キク、きく)肉(ニク、にく)の
ように音訓の区別がない場合や、銭(セン、ぜに)筆(ヒ
ツ、ふで)竹(チク、たけ)のように音と訓の音型がき
わめて近似している場合は(日本語中国語双方の音韻の
史的变化、および原音の-n、-m、-ng、-p、-t、-kの子
音韻尾のうしろに余計な母音がつけ加わるなどの音韻対
応のせを勘案する必要があるが)訓自体も実は漢字音
が和語化している可能性が非常に高い。ぜにとセン、ふ
でとヒツの違いはそのことばが入ってきたタイムラグに
基づくと考えられるのだ。

訓はすべて和語というわけではないことに気づいてか
ら、一見いかにも和語のように見えることばの中に、漢
語に由来することばが潜んでいるように思われはじめ、
日本語の語源問題に首を突っ込むことになった。そうい
う眼で日本語のことばを改めて見直してみると、漢語に
由来することばが思いのほか多くありそうなのに気づい
た。この数年はおに(鬼)ということばの語源探しに夢
中になってしまった。その間、文字通り鬼にとりつかれ
たのか大病を患った。今はその病は癒えたが、語源探
し癖はなお直っていない。くぐつ(傀儡)ということばの
語源問題にとりつかれている。そのことは別の機会に譲
るとして、ここでは表語文字の漢字を用いて表記するし
か方法がなかった、わが古代日本語の特殊な事情につ
いて書いてみたい。

具体的な問題をとりあげる前に最初から考え直してみ

よう。日本の列島にまだ漢字が伝わる以前、無文字時代
が長いあいだ続いた。漢字が伝わると和語は漢字の音と
訓を利用して表記されるようになった。日本語は漢字の
存在を抜きにしては語れないほど密接な関係を持って形
成されている。それを「腐れ縁」とか「不可避の他者」と
称する人がいる。川田順造先生も近著で、「やまとことばと
漢字のもつれ合い」の問題を興味深くとりあげておられ
る。日本語は非文字の音声言語であるときでも漢字まみ
れになっている。ことばを聞いてもその漢字が想起でき
ないと正確な意味が分からない。耳慣れないことばを聞
くと、ともかく漢字を当ててみようとする、当て字の習
性がわれわれにはある。

小学館の『日本大百科全書』によると、当て字とは、
「日本語を表記する際に、その語と意味のうえで直接関
係のない漢字の和訓や字音を借用する用法、またはその
漢字をいう」とあり、「本来、漢字を用いて日本語を書き
表すには、『やま 山』『たに 谷』のように、意味上の
対応関係をもつ漢字を使うのが通常であるが、対応する
漢字がない場合に、便宜的にある漢字の音や訓を借りて
書き記し、さらに和語以外の外来語、外国語の表記にも
及んだ。これが『当て字』である」とある。

私たちにとって大変悩ましいことは、最初は単にその
音や訓を借りるだけにすぎない場合でも、のちには表意
機能に優れる漢字の特性を活かしその字義に基づく語源
的な解釈や説明を示そうとする意識が働くようになるこ
とだ。その結果、ことばとその表記に用いられる漢字と
の関係が、単に便宜的なものから次第に語源的に何らか
の関係があるかのような漢字表記に取り替えられたり、
こじつけの解釈がつけ加わったりするのが避けられない。

古事記のトコヨ(登許余)やタナバタ(多那婆多)が、
のちに「常世」「棚機」と表記されるようになる。トコヨ
を「常世」と書くのは、トコヨを「常世」の字義と関係
づけて理解しようとする意識が生じたからである。しか
しトコヨの語源はほんとうに「常世」の字義と関係する
のだろうか。同様に、タナバタは万葉集では「棚機」と

表記される場合があるところから、一般にはその字義と関係づけて理解されている。だがタナバタは「棚機」の字義と本当に関係することなのかと問われれば、誰でも答えに躊躇するであろう。ここでも便宜的恣意的に漢字が当てられていない保証はない。そもそもの語源が明らかでないかぎり、スポーツ新聞でおなじみの駄洒落とあまり変わりがない当て字であるかも知れないのだ。

問題をもっと分かり易くするために卑近な例をとりあげよう。男性用上着をセビロといい、ふつう「背広」と漢字で表記する。「背幅の広いゆったりした上衣だから」とか、「市民服の意のcivil clothesから」とか、「ロンドンの高級洋品店街Savile Row」に由来するからとか、その語源には諸説ある（山口佳紀編『語源辞典』）、背幅が広いところからその語ができたのなら字訓を利用した新造語であるし、外国語の名詞に漢字を当てたのなら当て字である。漢語、和語（字訓）当て字、語源の関係を整理して、図式化してみよう。（下図参照）

むかしの人が漢字を用いてある和語を表記した時、ただ単に音や訓を借りるだけであったか、それとも語源にもとづく漢字の用法であったかは、今となっては判別するのはたいへん難しい。漢字に習熟した私たちの祖先たちが、後になるほど字義を活かす用法に工夫をこらし、またそれに頼ってことばを解釈する性向が生まれたことは確かである。しかし、ことばと文字の本来的な関係から言えば、それはまったく逆立ちした発想であり、表記に用いられる漢字の字義に頼るだけの語源探索はたいへん危ういということだ。カタログ（型録）は型の目録だからそういうのだというのに等しい。

<隠>の字音から「おに」ということばが生まれたというのは疑わしい。<隠>はオニということばに平安時代の人々が当てた当て字なのだとはとまず考えてみる。また、タナバタを<棚機>の字義に依拠して、水辺に棚を張り出し聖女がそこで機を織りながら神の降臨を待つ「棚

機津女」の祭儀にちなむことばであるなどという解釈もにわかには信じこまない。ともかくタナバタということばの当て字だと考えてみる。じっさい万葉集には<棚幡>という表記もあり、タナバタのハタは<機>ではなく<幡>であるとする民俗宗教学者もいる。漢字の音にしる訓にしるどちらもただことばの音声を表すのに利用されているだけに過ぎないのではないが、単なる当て字ではないかと疑ってみるところから出発すべきだというのである。用いられている漢字の字義に安易に頼ってさまざまに憶測をたくましくする前に、ことばの音声的側面にこそ語源にかかわる重大な情報が潜んでいるかもしれないと考えてみるということだ。音声的側面が見過ごされるのに反比例して、字義に頼った駄洒落のような民間語源説が氾濫する。

中国語に「約定俗成」ということわざがある。習慣や物事の名称が長年の実践を通じて次第に広く社会に公認されることを指していることばである。音声言語はまさにそういうものである。誰かが決めればそれに従って皆がまねをするというのではない。自然に形成された音声言語こそが重要なのだ。ときには文字を脇に置いて、それによって表記されることばの音声の方に耳を傾ける態度が必要であろう。

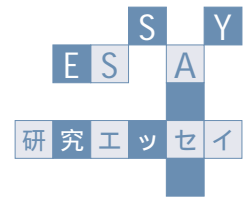
農具の「くわ」はふつう「鍬」という字が当てられる。東アジアの農具の分布を詳しく調査分析されている河野通明先生にお聞きしたことがだが、「くわ」は「鐮」の字音に由来することばであろうとのことである。ことばと文字がねじれて入ったのである。それと同様に、「おに」は「瘟」の字音が和語化した、「うそ」は「胡説」の語音が和語化したというのが、私の説である。日本語は漢字まみれであるとはいえ、ことばの伝播にいつも漢字がべったりへばりついていたらと考えるのはやはり早計であり、とくに俗語のような場合には文字とのずれや勘違い誤解が生じたとしても異とするに足りないのである。

漢語	和語（字訓）	<当て字>	語源	
山	やま			
川	かわ			
鬼	おに	<隠>	?	
七夕	たなばた	<棚機>	?	
	とこよ	<常世>	?	
	セビロ	<背広>	civil / Savile / 背広	対応
	カタログ	<型録>	catalog	あいまいな対応



非文字資料としての景観

八久保 厚志 (神奈川大学外国語学部・助教授)



1 文字資料と非文字資料

文字資料と非文字資料をあえてその性格の異なりを考えると、非文字資料は文字のない時代、文字のない地域において人類活動の痕跡をとらえることができる様々なものや身体動作、言葉等々といった人間そのものから発生したものとその環境と考えることになるのであろうか。それならば、景観は、人間活動や自然的変遷によって創りだされ、また作り替えられる資料として、非文字資料としての地位が与えられるのかもしれない。「景観」が文明史解明の資料としてみなされてきたことは、例えば先史時代でも壁画や絵文字等々によって、当時の景観が記録され、絵画、図絵、映像などで伝えられてきたことで示されている。また、文字が生み出され一般化した時代や地域でも同様である。ただ当然なことだが景観は自らを語ることはない。人が感じ、読みとらねばならない。ここに景観が非文字資料として位置づけられるかどうかの大きな課題がある。さらに以下のような技術的な課題も抱えている。

2 景観の資料化

まず、写真1はどこの景観であろうか？キャプションはこの問いのためにあえて付けていない。注目してほしい

ことは、まず建築様式。矢印1に示されているのはこの地域を代表してきた様式であり、矢印2に示しているのは1より新しい様式である。つぎに屋根の上に置かれた球状のもの(矢印3)。実は白黒写真でわからないが、建築物の色である。

答え。沖縄県那覇市首里城からみた北西方向の景観である。矢印1は琉球様式の民家。その特徴は木材建築で琉球赤瓦が屋根に乗せられている。写真ではわからないがシーサーが乗せられることが一般的である。矢印2は第二次世界大戦後、復興のためにアメリカ駐留軍が持ち込んだコンクリートブロックを使った組積造建築物。¹現在はコンクリートブロックばかりでなく、RC造建築物²が増えている。その特徴は、屋根がフラットであり、ルーフバルコニーやピロティを備えた建物が多いことである。さて、矢印3の物体は貯水用タンクである。戦後のアメリカ占領から本土復帰が叶った1970年代後半から80年代初頭、沖縄本島は恒常的な水不足に見舞われた。そのため一般住宅においても、自家用の貯水タンクの設置が一般化し、かつ、本島のみならず離島部においても貯水タンクが普及していったのである。

ここで次の問い。この写真を例えば韓国の南部もしくは台湾の景観と感じられた方。何故、そう感じられたか



についてひとこと。アメリカは、沖縄と同様コンクリートブロック製造機を戦後彼の地に持ち込んだのである。韓国南部は長らく森林資源の乱獲により禿げ山化しており、建築資材として木材供給が間に合わなかったことが沖縄と共通している。台湾の場合も同様であり、かつ台風等の気候条件も似かよっている。

このように記録された景観としての写真(非文字資料)は自然条件、国際関係、民俗等々様々な要素によって構成されているのであるが、それを分析するには文字によって記録された資料が重要である。ただ、この点について、人の記憶が鮮明なときには文字資料によらなくても伝達や記録が可能であることもまた事実であろう。

次に写真2と3。この景観は沖縄県宮古島から来間島へ架けられた来間大橋である。写真2は橋の中期から宮古島を撮影したもの。写真3は来間島の展望台から橋の全景を撮影したものである。しかし、同じ橋という根拠は撮影者しか示せない。つまり、この景観をみた人が同じ場所の角度違いであるとの判断はできないのである。しかし、この写真は、植生、地形、雲量等々は同じ時期、

同じ場所であることを類推させる要素を秘めている。

3 資料としての課題

以上のように、景観の資料化には時間(変化)は伝わるが、記録媒体によっては色が伝わらない、空気が伝わらない等々の課題がある。景観を資料化していくには、これまで図像、絵画、写真、映像、ホログラムへと2次元から3次元へと高度化してきた。今後は、荒唐無稽なアイデアと思うが、4次元的な、つまり時間軸を取り込むことや、香りなどの記録ができる記録媒体やソフトウェアが必要となつてこよう。景観は観察者やそこに住む人々にとって同時にみることができる。その時、視覚、色、香り、空気も体験することができる。景観を非文字資料として体系化していくことにとって、新しい記録媒体を如何に開発してゆくかも重要であろう。

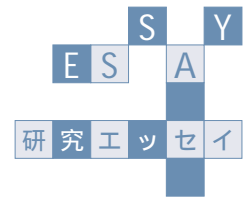
- 1 組積造建築物：石、煉瓦、コンクリートブロック等を積み上げた建築様式。
- 2 RC造建築物：レディミクスコンクリート(生コン)を型枠に流し込んで成形する建築様式。

写真2



写真3





中国図像学という迷宮

佐々木 睦 (東京都立大学人文学部・助教授)

本COEプロジェクトに共同研究員として参加させていただき、『生活絵引き』の東アジア版を作る作業に着手したところである。僕の担当は中国なのだが、中国の絵画資料を見ては、中国人にとって「観察」とは？「写実」とは？という問題と向き合い苦悩している。それは絵画そのものの持つ欺瞞性に加えて、中国絵画の特殊性にもよるところがある。例えば宮廷に貴族と鹿がいる絵、いかに写実的に描かれていても騙されてはいけない。これは「鹿」が福祿寿の「祿」と音が通じるめでたい動物であるから描かれているにすぎず、決してその場面を観察して描かれたものではないのだ。僕はこういう図像を見ては感動のあまりめまいを起こす。最近の調査においてもそういう目のくらむ体験を経験している。

2003年の12月に広東省広州市・仏山市、ならびに香港を訪れ、祠廟とその周辺の図像調査をする機会にめぐまれた。調査は以下のような日程で行った。

日 時	調査地点	場 所	備 考
1 12 / 26	仁威古廟	広州市	北帝を祀る
2 12 / 26	陳氏書院(陳家祠)	広州市	陳氏一族の宗祠・子弟教育所
3 12 / 27	祖廟	仏山市	北帝を祀る
4 12 / 27	三元里古廟	広州市	北帝を祀る
5 12 / 28	北帝廟	香港・元朗	
6 12 / 29	北帝廟	香港・長洲	
7 12 / 29	北帝廟	香港・赤柱	
8 12 / 29	北帝廟(玉虚宮)	香港・灣仔	

広州の陳氏書院(陳家祠とも呼ぶ)は清の光緒二十年というから1894年の創建である。広東省の陳氏の宗祠であるとともに、一族の子弟教育の役割を担ってきた。現在は一般に開放され、広東民間工芸博物館を兼ねており、建物全体が全国重点文物保護單位に指定されている。門をくぐり、一目見て驚かされるのは、その過剰なまでの建築装飾である。建物の屋根から梁から棟木から柱や欄干にいたるまで、一面が精巧な陶像や塑像、石刻、木彫で埋め尽くされている(図1)。ここは広東の装飾芸術の粋を集大成した殿堂でもある。

彫られている図像としては吉祥のシンボルである動植

物、神々や歴代の皇帝、将軍に賢者、だまし絵に『三国志演義』や『封神演義』の一場面等々、それぞれに深い意味がこめられており、建物全体がまるでイメージとシンボルの百科事典のようである(図2「桃園の誓い」の場面)。ここは一日中いや一年中見ても飽きないだろう。胸おどる物語や幸福の象徴に囲まれ、陳一族の子弟たちはさぞや豊かな少年時代を過ごしたに違いない。

今回の調査では北帝廟を中心に回った。北帝はその名に似合わず、現在主として南方で信仰されている神で、明代の通俗小説では主人公として妖怪退治をしたりもする。広州・三元里の北帝廟はアヘン戦争時期に地元の農民によって組織された義勇団の本部が置かれた場所であり、廟の傍らには当時をしのばせる砲台が据えられている。現在では三元里抗英闘争記念館としても使用され、広州市の「愛国主義教育基地」にも指定されている。僕が訪れた日、大砲の周りでは子供たちが遊び回り、砲身をのぞき込むとゴミがつまっていた。

注目すべきは敷地の傍らに放置されていた、やはり当時のものと思われる石造りの獅子で、その台座の部分には西洋人が彫られていた(図3)。中国や日本の仏像の台座にも異形の姿をもつ人物や怪物が仏像に踏みつけられたり支えていたりするポーズで彫られる例が多々ある。これは邪鬼や羅刹だと説明されるが、いずれにせよ邪悪な存在が演じる役割だ。それを当時広東で略奪を暴行をほしいままにしたイギリス人に負わせている発想は、あっぱれとしか言うほかない。

もっとも中国語では「鬼」は「幽霊、化け物」の他に「外人」の別称として使われるから、邪鬼には違いないが。これと同じ発想のものは広州市の隣、仏山市の祖廟にもあった。やはりアヘン戦争時期のものである(図4)。

宿の近所に祭具を取り扱う問屋があったので、ふらっとのぞいてみた。春節(旧正月)が近いせいか、店内は新年を祝う吉祥グッズであふれかえっていた。なかでも財神グッズは富をもたらすありがたい存在としてかかせないアイテムである。財神はふつう旧時の文官のいで立

ちをした壮年の男の姿で描かれ、やはりめでたいとされるぶくぶく太った子供がその役割を演じている場合もある。その中に奇妙な財神がいた。ここ何年か中国や香港で目にする度に気にはなっていたものである。なんとスヌーピーやキティちゃん、ミッキーマウスにくまのプーさんなどの人気キャラクターが財神に扮しているのである(図5、図6)。

僕らもクリスマスの季節、人気キャラクターをサンタクロースに扮させることはよくあることだ。ところが問屋のお兄さんに尋ねてみると、スヌーピーたちが財神の格好をしているのではなく、これ自体がすでに財神なのだと言う。念のためにもう一度尋ねたが、答えは同じであった。驚くべきことである。外来神だ。スヌーピーもキティも中華の地で神となったか。我らが七福神も元をたどれば外国の神ばかりだが、やはりめまいを感じずにはおれない……。

三元里古廟の西洋人邪鬼といい、このクマのプーさんの財神といい、本来形而上的な概念であるべきところに、即物的なものが何の疑いもなく、そのままの形で入り込んでいるのである。

香港の元朗旧墟地区は古い香港の生活がそのまま生きている場所であり、その一角に北帝廟がある。ここも春

節に備えて、付近の家々の門の両脇にはめでたい対句を書いた春聯が貼られていた。他に幸せを呼ぶお札として「福」を逆さまにしたものとか(「倒」と「到」が同音であることによる)、「大吉」や「招財進宝」を一字にしたものが貼られていた。その中に一枚、奇怪なお札を見つけた(図7)。

これは「福」と「壽(寿)」の文字、そしてミカンの絵から成る合成字である。「橘」(ミカン)は広東語では「吉」に音が近く、春節には戸口を飾るめでたい果物だ。まさに文字と絵とのスリリングな結婚である。ならばこれは絵なのだろうか、それとも漢字なのだろうか? そもそも漢字の成り立ちを考えれば、モノをかたどった字や、既存の字の組み合わせから成る字などがあり、これとてけって不思議なものではない。しかしこういった不思議文字は通常は「呪符」とされ、絵画とは見なされない図像であるとともに、永遠に辞書には載らない漢字なのである。

過剰図像空間、西洋人邪鬼、プーさん神やキティ神、幸せを呼ぶ不思議文字、この象徴性と即物性の織りなすパベルの図像博物館に僕は魅惑され、めまいさせられっぱなしである。そして僕は中国人にとって「図像」とは、という答えの出ない迷宮をさまよい続けるのである。





威厳と挑戦 大英博物館の 非文字資料から広がる風景

大西 万知子 (COE研究員・RA)

今回の「海外博物館事情」は、前回のフランスに続いて英国の博物館です。英国で、最大規模の収集品を持ち、最も多く世界各地の人々が訪れる博物館は、ロンドンのブルームズベリー地区にある大英博物館です。大英博物館の設立は古く、1683年、オックスフォードのアシュモリアン博物館の設立に続いて、下院で可決された法令によって設立された1753年、一般公開された1759年にまで遡ります。この博物館は、スローン、コットン、ハーリー氏によるコレクションが設立当初の収集品の原点と伝えられています。「日の沈む処なし」とうたわれた大英帝国の全盛期、様々な地域から集められた膨大な物の数々も、今日の博物館の収集品となっています。その収集品には、日本の漆器や陶磁器、浮世絵も数多く含まれ、日本古美術課の収蔵するものだけでも約2万5千点と報告されています。これらの多くは、17世紀後半以後、長崎の出島から、また、19世紀中期以後は、日米修好通商条約締結で開港した横浜から欧米へ海を渡っていったものです。1862年の第2回ロンドン万国博覧会では、初めて、大規模に日本の品々が展示され、1867年のパリ万国博覧会では、正式に徳川幕府が参加しています。海を渡ったこれらの品々は、西欧の人々の熱いまなざしをうけ、当時の欧米諸国の人々の服装や、絵画の技法にも影響を与えました。2001年、英国では、「Japan Festival 2001」と題して、各地で、流鏝馬や阿波踊りなどをはじめとした日本の伝統芸能や美術、文化が紹介されました。博物館においても、関連した企画展示が催されました。ここでは、大英博物館で行われた3つの企画展示に焦点をしばり、今日の英国の博物館の挑戦の姿を紹介します。

まず、1つ目は、2001年6月14日から、2002年1月13日まで行われた「Souvenirs in contemporary Japan」展です。この展示は、大英博物館民族誌学課の学芸員、Sara Pimpaneau氏の企画、研究者 Inge Daniels氏の協力により開催されました。展示されたものは、Pimpaneau氏自身が、2001年1月15日から2月6日まで、日本の各地を旅し集めたものです。展示されたものは、宮島の杓子

から温泉饅頭まで、日本各地で土産や名産として売られているものばかりです。同氏は、この展示を通じて、日本人々にとって、旅に、「おみやげ」を買うという行為が不可欠であり、旅は、写真やビデオ、そして、「おみやげ」を通じて、記録され、思い出されることができると述べています。特に、食べ物の「おみやげ」は好まれ、それは、旅の記録を残すことができると同時に、家や故郷で、旅に出た人の帰りを待っている人と、その記憶を語りあったり、一緒に味わうことで、その旅の記憶を分かちあうことができるからではないかと彼女は分析しています。私は、なにげなく、旅先で買っている「おみやげ」の存在理由に気づかされたようで、とても新鮮な印象を受けた展示でした。この展示を見て、何より、一番



© The British Museum 2001

驚いたのは、日本人自身だったかもしれません。なぜなら、ガイドブック片手に、ロゼッタ・ストーンやエジプトで発掘されたミイラを一目見ようと厳かに入った扉の向こうに、どこかで見たお饅頭が、堂々と、展示されていたのですから。

2つ目の展示は、2001年9月5日から12月2日まで行われた「Shintō: The Sacred Art of Ancient Japan」展です。この展示は、大英博物館日本古美術課、日本の文化庁、日本基金の共催によるものです。展示されたものは、縄文土器、土偶、銅鏡から彫刻、絵画にいたる約80点です。多くの品々が、日本の神社や寺院、博物館から貸し出されたものです。この展示の意図は、縄文時代からすでに見られた人々の信仰的態度である自然への畏敬の念、独創性、美意識、そして「神」(Kami)の存在を、捉えることでした。今回の展示は、幅広い年代から、そして、多くの種類から展示品が選択されていました。これらのモノを通じて、人の精神的なもの、人の内的なもの、目にみえないものを引き出そうという試みは、斬新な展示だったと感じます。日本では、普段はお互いに一緒に収蔵されることもなく、奥深く大切にしまわれているこれらのモノたち、突然に、世界各地から訪れる来館者に囲まれた展示ケースの中で、どのような話をささやきあっていたのでしょうか。

3つ目の紹介は、2001年11月14日から2002年3月3日まで行われた「LIGHT MOTIFS: An Aomori float and Japanese Kites」展です。この展示は、青森県青森市、滋賀県八日市市、大英博物館民族誌学課の共催によるものです。この展示は、青森のねぶたと八日市市の凧を、その形の多様性や美しさだけでなく、それぞれの地域に根付いた伝統芸能として、その地域とそこに暮らす人々のアイデンティティのしるしとして表現していました。この展示では、青森市から、ねぶた師とその製作チームが招待され、館内に、「源義経渡海(みなものよしつねとかい)」の紙と木で作られた人形ねぶたが紹介されました。また、天井は、八日市市で作られた、大きい凧と小さい凧で、色とりどりに飾られました。この人形ねぶたは、出来上がったものを展示する手法ではなく、その製作過程を見ることができ、その様子は、ガラスケースを通してでなく、Aomori cityとThe British Museumと書かれた小さな提灯がたくさん下げられた低い柵から見ることができました。多くの子供たちが、不思議そうに、楽しそうに、仕上がっていくねぶたを見上げていました。そして、完成もまもなくかと思われる頃、そこを

訪れてみると、灯りがともされ、命を吹き込まれたねぶたがありました。まわりを見渡すと、職人の方々が見当たりません。民族誌学課学芸員に尋ねてみると、ねぶたが完成したので帰国したとのことでした。なんて粋なのでしょう。職人の方々が、あ・うんの呼吸で黙々と作業し、少しずつ、でも確実に仕上げていくその姿は、ねぶた以上に、人々を魅了していました。

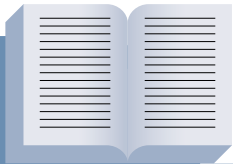
これらの大英博物館で行われた3つの展示を通して気づくことは、静的で視覚的なモノとヒトの関係が中心であった博物館の展示が、動的で多感覚的な関係の中でも模索されている点です。その模索は、触れる展示、デジタル展示、映像展示という手法技術の発達によるものだけでなく、モノとヒトと、その背景にある精神世界や地域という場との関係の解明によってもなされています。モノを日常生活の、季節や年中行事のリズムの中に置いたり、また、モノを出来上がった形だけでなく、作成する、使用する、あるいは壊す過程に重点を置く展示方法は、そのモノにつながる人々の身体的記憶や風景の中へ、見る人の共感を導くことなのでしょう。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」のプロジェクトの意図する人類文化のより深い理解への挑戦は、海の彼方、大英博物館でも始まっています。



© The British Museum 2001

参考資料

- Caygill, Marjorie (1999) The British Museum. A-Z companion. The British Museum.
- The British Museum (2001) LIGHT MOTIFS: An Aomori float and Japanese Kites. The British Museum.
- The British Museum (2001) Shintō: The Sacred Art of Ancient Japan. The British Museum.
- 藤野幸雄 (1975) 『大英博物館』、岩波書店



Field Note

中国雲南省麗江調査記

トンバ 東巴文化の今昔



田上 繁・中村 政則・的場 昭弘・佐野 賢治

report

田上 繁（神奈川県立大学大学院歴史民俗資料科学研究科・教授）

1

東巴經典と現代に伝わる原初的な紙製法

日本経済史を専攻する私にとって、生涯、海外で研究調査を行うことなどないものと思っていたが、本年3月初旬、COEプログラム研究の一環として初めて中国を訪問する機会に恵まれた。今回調査した雲南省麗江市は、麗江古城が1997年に世界遺産に指定されたことに加え、東巴文化研究院による『納西東巴古籍訳注全集』、長江上流の三江併流地域が、それぞれ「無形の記憶」、「自然と文化」の世界遺産として登録された街である。

とくに、現在、世界で使用されている唯一の象形文字である納西族の東巴文字で書き表された、約3万巻、1800種類にもおよぶ東巴經典の主要なものを収録した『納西東巴古籍訳注全集』は、納西族の自然観・靈魂観・世界観などを知る上できわめて貴重なものとなっている。本全集は100巻からなり、玉龍公園内にある東巴文化研究院において老東巴が經典や儀式の次第を思い出ししては記し、研究員がその解釈文を刊行していくといった作業が進められたという。

私たち調査団一行がその東巴文化研究院を訪ねたのは、

調査半ばの3月8日のことであった。研究院院長世紅氏をはじめ研究員から本全集の編集から刊行に至るまでの経緯を詳しくうかがい、經典をスキャナーで読みとり、それらをすべて収録する、東巴による解説と研究員による国際音標への読み替え、さらに納西語による翻訳、中国語による直訳、中国語での意味説明、といった過程を経て完成させた本全集の編集方針から学ぶことは多い。そして、単に学術面だけを追及するのではなく、こうした編集事業が研究院と民間との結合を企図して推進されていることに、東巴文化の継承、若者の東巴養成といった課題を真正面から取り組もうとする関係者の姿勢を読みとることができる。

ところで、同研究院を辞去しようとしたとき、庭の片隅で紙を製造している1人の職人に出くわした。その職人は、晴天のもと簡易な道具を使って一心に作業を続けていた。主な道具は、繊維（原料はジンチョウゲ科の雁皮と思われる）とネリ（原料は不明）と水をかき混ぜて紙料液（原質）を作るための竹製の円筒状の入れ物、木の

写真1



紙製造のための道具 バター茶用の竹筒を利用した紙料液器、石製の紙槽、箆を敷いた浮き箆（民俗村にて）

写真2



「溜め漉き」による紙の製造（東巴文化研究院にて）

写真3



「箆伏せ」による乾燥と空き瓶による整え作業（東巴文化研究院にて）

枠に簀を敷いた紙漉き器（紙模。浮き簀）その紙漉き器を浮かべる紙槽、それに乾燥用のブリキを張った木板だけである（写真1）。手漉き紙の製法には「溜め漉き」と「流し漉き」とがあるが、この製法は紙漉き器を水を入れた紙槽に浮かべて行う「溜め漉き」である（写真2）。しかも、そこでは漉き終えた紙を簀の上に乗せたまま運び、直接乾燥板に張り付ける「簀伏せ」の技法が採用されている（写真3）。その場合、刷毛は一切使わず、空き瓶を使って紙を整えている。これは、表面を平にし、かつ光沢を出すために行われるものである。従来は動物の牙などが利用されていたといわれる。

中国で発明された紙（現在知りうる最古のものは前漢時代の遺跡から発掘された麻紙といわれる）の製法は、シルクロードを経て西方や、また、東南アジア、朝鮮半

島、日本にも伝播してその技法が発達していったが、麗江において現在もなお、最も原初的な方法で紙が製造されていることに驚かされた。そこで製造される紙は、東巴經典を書いたり、その文字練習のために利用されるもので、したがって、道具の浮き簀も經典用の紙の大きさになっている。東巴經典は納西族の民族文化のエッセンスともいわれるが、紙の製法もその經典と一体となって原初的技法を保持しながら今日まで継承されてきたのである。その製造方法、無駄のない身体の動き、簡易な道具、繊維の原料やネリの種類、など紙製法の歴史と職人技法（身体技法を含む）さらに、世界への伝播のあり方を究明する上で多くの示唆を与えてくれる。この一事をもっとしても、今回の麗江訪問は実りの多い調査であった。

report

中村 政則（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）

2 世界常民 雲南省で考える

今回の雲南省調査は私にとって初めての民俗調査であったが、まことに興味深く、有意義なものであった。昆明・麗江・大理市の博物館、図書館、民俗研究所、民俗文化研究院などを訪問し、館長・研究院長などの話を聞いたり、展示物を実見して、「百聞は一見にしかず」の古語を思い出した。リーダーの佐野賢治氏が20年にわたって培ってきた現地の民俗学者との人間関係のおかげで、行く先々で歓待をうけ、実に楽しく能率的な調査ができた。「本当の民俗調査はこんなものではありません」と佐野氏はいっていたが、確かに私たちは苦労することもなく、いい人、いい景色、いい文化遺産に出会え、美味しい料理を最後まで堪能できた。研究の面でも、私が

得た収穫は少なくない。以下に、三つの感想を述べておきたい。

1. グローバリゼーションと文化

雲南省は北京・上海などの大都市にくらべれば、中国西南部の周辺に位置する。ところが省都昆明に到着してみても、その大地方都市ぶりに驚いた。人口は400万人、中心街はまるで東京新宿の大通りを思わせるような混雑ぶりであった。3日後に主目的地・麗江に行ってみると、有名な古城（旧市街）は旅行者で賑わっていた。1997年に世界遺産に指定されたこともあって、観光地化はいつそう進展していた。出かける前に『グローバル化で文化はどうなる？』（藤原書店、2004）を読んだばかりなので、いつしか経済成長と文化の関係に思いをめぐらしていた。ただ、案内役の白庚勝氏（納西族の民俗学者）が観光地化というけれど、麗江市を世界に知らせ、多くの人々に来てもらうことは、「30万納西族の自立とアイデンティティを守るたかひなのだ」と述べたことが忘れられない。

2. 三層文化論

今回の調査で、私は文字資料と非文字資料との関係について考えていた。順列組み合わせでいけば、文字資





料を文字資料だけで読む、非文字資料を非文字資料だけで読む、文字資料は非文字資料に補完されなければ読めない、非文字資料は文字資料に補完されなければ読めない、この4通りの立場がある。このことを話すと、先ほどの白氏が面白いことを言った。東巴文化を理解するには、三層文化を考慮に入れたほうがいい。つまりに漢民族の文字(漢字)文化、に納西族の東巴文化があって、底辺に民衆の非文字文化がある。の非文字文化が蒸気のように立ち上がり、の文字文化が雨のように下に浸透して、真ん中の東巴文化が形成されるというのである。卓見だと思った。ちなみに、麗江を歩き回っていて、3という数字に気づいた。上に極楽、中に人間界、下に地獄という区分、東巴儀礼も数百種類あるというが、大きく分ければ祭天(祖先を祭る) 祭署(竜神、水の神様を祀る) 祭風(心中で亡くなった人を弔う)の3つに分けることも可能だ。そういえば、麗江のホテルでご馳走になった高級納西料理も、前菜から始まって中菜、メインディッシュと三段階に分かれていた。なぜ三つなのか、私は思考が弁証法的だからだと酒宴の席

で感想を述べたが、ヘーゲルのいえば納西族は媒介の論理を得意としているのかもしれない。

3. 世界常民

中国は多民族複合社会である。とはいえ、55プラス1といわれるように55の少数民族と漢民族という対比であって、漢民族が全人口の9割以上を占めている。そういうこともあって、中国政府は少数民族政策に力を入れている。私は雲南省民族博物館の展示を見ながら、民衆は世界どこでも同じように生きているのだなと思った。展示されていた民族衣装や装身具あるいは椅子や彫刻など諸民族の工芸品に優劣はなく、対等の価値をもつ。私は民俗学者や文化人類学者が文化相対主義の立場に立つのが非常によくわかった。とっさに世界常民という言葉が思い浮かんだ。柳田国男に同じ言葉があるだろうと思って、佐野氏に聞くと、柳田は世界民俗学という言葉を使っているが、世界常民という言葉はないという。無いのなら、世界常民という言葉をつくれればいいと思った。新しい方法の構築に結びつくはずである。

report 的場 昭弘(神奈川大学大学院経済学研究科・教授)

3 麗江と大理の狭間で考えたこと

3月6日土曜日昆明発の飛行機は麗江空港に着陸した。つい数年前までは大理経由でしか行けなかったという。その変容振りに一同驚く。市内に入り、町を見学したが、そこでさらに驚く。人類の文化遺産に指定されたことを示す大看板と観光客の人だかり。確かに、東巴文字、古城、玉龍雪山、金沙江回流など観光の目玉はいくつもある。かつての秘境と現在の観光地。この二つの微妙な対比それ自体ですら観光かもしれない。

3月9日に訪ねた大理はこれとまったく違っていた。閑古鳥の鳴く市内、人気のない飛行場。食事をねだる子供たちの群れ。もはや盛りを過ぎた観光地である。中国社会の発展のひとつの有様を示すものと言えようが、文化政策自体の有り様も示していると言える。

雲南省は少数民族の土地であるから、それぞれの文化遺産に誇りをもち、それを言わば見世物にすることはおかしいことではない。むしろ漢民族を中心とする中央政府による国民的文化遺産に対するアンチでもある。地域

から文化を発信することは、今では世界の趨勢でもある。

かつて1980年フランスで文化遺産年が実施され、慣習や作法などありとあらゆるものが、これまでのおきまりの文化遺産にとって代わって展示されるようになった。「おらが村の文化遺産」こそ、文字資料中心の国家の歴史の対極にあるものである。これは文化遺産が国家の記念物から、地域や集団の記念物に少しずつ変わってきたこ



世界遺産登録記念壁と復元された水車

とを意味している。もちろんそれぞれの集団には文字資料や歴史資料が欠けているのであり、文化遺産をつくりだすには集団の記憶が必要とされる。

だとすれば、麗江も大理も結構なことなのかもしれない。とはいえ、「おらが村の文化遺産」も中央政府の文化政策を抜きにして語ることはできない。麗江の町に次から次へと建てられるホテルや施設、道路など巨大なインフラ整備を地方が担えるはずがない。一方すでに投資が終わり、忘れられた感のある大理。いつ麗江が大理になるかわからない。

これらの町が語りかけているものは、歴史と文化をめぐる社会の変化の姿なのである。国家による民族政策という枠の中で展開する民族の記憶のあり方がまさにそれである。中国史の中では傍流にしかすぎない納西族の麗江が、人類の文化遺産となることによって突然世界の注目を浴びると、それは中国史全体を揺るがしかねない変容を与えるのである。歴史上の位置から言えば、文字資料を見る限り大理がはるかに上である。しかし、文化遺産がもはやそうした中国の正史や文字資料を前提にしな

いとすれば、すなわち現在のわれわれの記憶から見るとすれば、東巴文字や納西族の方にむしろ興味が湧く。

しかしながら中国における民族政策や文化政策のコード（指し示す意味）が、麗江を高く評価し、その文化遺産の復興を意図しているものだと断定するにはまだ早い。むしろユネスコによって制度化された人類の文化遺産という権威がもたらしたものである。失われた文化遺産の保護をつうじて、これまで国家的記憶の末席を汚すにすぎなかった名もなき地域の文化遺産が注目を浴びるようになったのである。

非文字資料の体系化ということを思い浮かべるとき、こうした社会の変化を忘れることはできない。文字資料と国家という枠組みの崩壊の上に非文字資料とグローバル化がある。だとすれば、非文字資料を体系化するという試みは、人々が何を記憶したいかという問題を抜きにして語ることはできない。すなわち記憶のコードの意味を掴み取るこそ非文字資料の体系化なのであろう。

report

佐野 賢治（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授）

4 “観光”という情報発信

この春、5年ぶりに麗江を訪れその変貌ぶりに目を見張った。1999年に参加した国際東巴文化芸術節は、1996年の麗江大地震を克服し、97年旧市街が世界遺産に登録されたことを記念して開催された。主会場となった体育場正面には、この世とあの世を結ぶ巨大な神路図が設えられ、フィナーレは民族創生神話、黒白戦争を題材にした老若男女による創作劇というように民族の祭典といえるものだった。学術方面では国際学術研究会が開かれた。郭大烈・白庚勝という納西族の民族・民俗学者が総合プロデュースした結果ともいえるが、納西族の文化が東巴文化を中心に国内外にアピールされた。その頃から、日本でもその象形デザインの斬新さから東巴文字がTシャツや缶飲料のロゴに使われているのを目にするようになった。

今回訪れた麗江古城には土産物店が並び、郷土料理店には観光客があふれていた。その数、年間300万人という、納西族人口の10倍の数である。中心の四方街では、自然

発生的に民謡アリリに合わせて踊りの輪ができ主客の交歓が行われていた。死後、納西族の人々の霊魂が赴くとされる霊峰、玉龍雪山の麓には、民俗村や巨大な神路図を中心に納西族の神々を配した万神園が開園していた。一方、東巴文化研究院では東巴經典の校訂作業が継続して行われ、東巴文化博物館では東巴文化の展示はむろんのこと、東巴文化学校を設立し、その教科書として『納西象形文字』、『納西族伝統祭祀儀式』、『納西象形文古籍』、『納西族伝統工芸』が作られ東巴の後継者養成にあたっていた。2003年、3万巻1800種類に及ぶ東巴經典のうち、主要なものに英文要旨・国際音標・漢語の直訳、意識をつけた『納西東巴古籍訳注全集』100巻が無形の記憶遺産として、世界遺産に登録された。この年、第2回国際東巴文化芸術節が東巴文化百年成就展として開かれ、学術研究の国際化が再確認された。納西族の研究者の努力により、学術と観光がバランスよく結びつき、麗江地区の発展に寄与している姿をそこに見た。



しかし、観光開発も一因するのか以前に比べ流水の水質汚染などを見ると将来にわたる持続への懸念が頭をよぎった。中国のどこの町に比べても、文字通り麗江の町の水が清冽なのは、水の神、龍神に対する信仰、自然との共生を説く東巴教がその背景にあるからである（表紙写真）。

再会を楽しみにしていた、1993～96年の民俗総合調査の折に話を聞いた東巴文化研究院の老東巴はみな鬼籍に入られていた。そのうちの一人、日本訪問を熱望していた和開祥師は自分が死んだら、あの世へ行けるだろうかと神路図の解説をしながら気をもんでいた。大東巴の霊を送る儀礼を執行できる東巴が自分以外にいなかったからである。東巴文字によって記された東巴經典の解釈は東巴によって微妙に違う。東巴文字はもともと東巴儀礼を記すために生まれ使われてきた。まさに、儀礼という非文字資料を文字化したものであり、儀礼を知悉していないと読み解けないのである。一般庶民の葬式で神路図を使うことは絶えて久しい。考えてみれば、私自身、東巴文化の伝統的な雰囲気をかろうじて体感できたとともに、観光資源として再構成されていく過程、文化遺産としての記録と継承のそれぞれの場面に立ちあってきたことになる。

振り返ってみると日本では、柳田國男『遠野物語』をベースに“民話の里”として地域振興を推進する岩手県遠野市の事業を始め、民俗芸能などが各地の町おこし・

村おこしのイベントとなっている。民俗学と観光開発の関係が正面から問われている。お隣の韓国では、さまざまなムードン儀礼が行われる“端午節”の世界遺産登録を視野に入れた国際民俗祭が今年の6月、江陵で開かれた。「無形文化遺産とその保護」を中心テーマとしてアジア民俗学会が会期の初めに開かれた。近代化の中で省みられなかった、無形・有形民俗文化への取り組みがそれぞれの国情に応じて報告された。昨年、慶州でのユネスコ文化万博では「文化の多様性と普遍的価値」が、今秋10月のICOMソウル会議では「無形文化遺産と博物館」がメインテーマとなっている。伝統文化の保護と活用が、ローカル・ナショナル・グローバルそれぞれの立場から注目されている。

観光の語は、もともと『易経』の国の光を見るに由る。政治作用と民俗変化の関係、移レ風易レ俗（風を移して俗を易える）風俗の語とともに為政者と民衆生活の関係を表している。バリ島のケチャ、アイヌ民族の熊彫りなど具体的事例研究も含め、民族・民俗文化を動的・イメージ的な視点から、あるいはフォークロリズムという観点から考察する観光人類学・民俗学という分野での論考も近年重ねられてきている。

非文字資料と無形の文化遺産はその性格が重なる面が多い。研究成果の地域的還元、世界に向けての情報発信法として“観光”の意味を考えさせられた麗江行であった。



無形の記憶遺産として世界遺産に登録された『納西東巴古籍詁注全集』100巻（東巴文化研究院）

玉龍雪山の麓、万神園の巨大神路図の前でポーズをとる老東巴

受贈資料一覧(書籍・雑誌)

(2003年8月~2004年3月)

タイトル	発行所
阮 儀三『江南六鎮』	河北教育出版社(同濟大学 寄贈)
路 秉傑編『天安門』	同濟大学出版社(同濟大学 寄贈)
同濟大学建築と城市規劃学院編『除從周記念文集』	上海科学技術出版社(同濟大学 寄贈)
徐 芸乙編『民間年画』	湖北美術出版社
高 有鵬『民間廟会』	海燕出版社
高 有鵬『民間百神』	海燕出版社
高 有鵬『中国民間文学史』	河南大学出版社
徐 芸乙『身边的芸術』	山東画報出版社
東南文化編集委員会編『東南文化 2003』No.2、4、6、8、10	南京博物院(徐芸乙氏 寄贈)
韓 順友『古汴散記』	中国文学出版社(河南大学中文学部 寄贈)
開封旅游管理委員会編『開封旅游大観』	中国景鎮年鑑社(河南大学中文学部 寄贈)
『清明上河図』(複製)	(河南大学中文学部 寄贈)
趙 玉安主編『青龍山慈云寺』	(河南大学中文学部 寄贈)
劉 衛学『全真探秘 開封延慶觀』	河南大学出版社(河南大学中文学部 寄贈)
劉 衛学『開帝神工 開封山陝甘会館』	河南大学出版社(河南大学中文学部 寄贈)
王 瑞安主編『山陝甘会館』	中州古籍出版社(河南大学中文学部 寄贈)
上海図書館近代文献部『清末年画 上海図書館蔵精選』	人民美術出版社(沈麗雲氏 寄贈)
小谷 凱宣編『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』	南山大学人類学研究所
クバプロ 海外のアイヌ文化財事務局 『海外のアイヌ文化財 現状と歴史 第17回「大学と科学」公開シンポジウム予稿集』	海外のアイヌ文化財事務局(小谷凱宣氏 寄贈)
沖縄県立芸術大学附属研究所編『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料目録』	沖縄県立芸術大学附属研究所
沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料集第一巻 紅字型紙(一)・(二)』	沖縄県立芸術大学附属研究所
大和村志編纂会編『大和村の近現代 大和村志資料集1』	大和村
『名護博物館紀要・10 あじまあ』	名護博物館
『沖縄県立博物館紀要』第25号・第27号	沖縄県立博物館
宮城村落民俗調査報告書編集委員会編『みんぞく』第15号	沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科アジア文化ゼミ
浦添市美術館編『浦添市美術館所蔵品総目録』	浦添市美術館
沖縄県公文書管理部史料編集室『沖縄県史ビジュアル版』1、3~12	沖縄県教育委員会
沖縄県公文書管理部史料編集室『唐船図 進貢船図』(複製)	
沖縄県公文書管理部史料編集室『那覇絵図 友寄筑登之親雲上喜恒筆』(複製)	
日本浮世絵協会編『浮世絵名作選集』全20巻	山田書院(井川政己氏 寄贈)
暮らしの手帖編集部編『戦争中の暮らしの記録』	暮らしの手帖社(井川政己氏 寄贈)
後藤 和雄ほか編『写真集甞る幕末 ライデン大学写真コレクションより』	朝日新聞社(井川政己氏 寄贈)
比較民俗学会編『比較民俗学』	比較民俗学会
比較民俗学会編『民俗과 經濟 2003년 비교민속학 회동계학술대회』	比較民俗学会
비교민속학회編『민속과 교육』	민속원(韓国比較民俗学会 寄贈)
비교민속학회編『민속과 종교』	민속원(韓国比較民俗学会 寄贈)
부산근대역사관編『사진첩서로 떠나는 근대 기행』	부산근대역사관(延世大学博物館 寄贈)
국립민속박물관編『산존』	국립민속박물관(韓國民俗博物館 寄贈)
연세대학교박물관編『고려 조선시대 질그릇과 사기그릇』	연세대학교박물관(延世大学博物館 寄贈)
연세대학교박물관編『조각가, 평화를 말하다』	(延世大学校 寄贈)
ベトナム考古研究所・ベトナム社会科学委員会国際協力部 『DONG SON DRUMS IN VIET NAM』(ベトナム銅鼓図録)	六興出版(萩原金美氏 寄贈)
門別町教育委員会編 『コムカラ遺跡 日高自動車道厚真門別道路工用地内埋蔵文化財調査』	門別町教育委員会(街道重昭氏 寄贈)
民俗芸能学会編集委員会編『民俗芸能研究』創刊号~35号	民俗芸能学会
서울역사박물관 고려대학교박물관『서울 하늘·땅·사람 Seoul heaven·earth·man』	서울역사박물관, 고려대학교박물관(延世大学博物館 寄贈)
佐賀県立名護屋城博物館編『日韓交流の窓 釜山・蔚山・慶尚南道歴史と風土の旅』	佐賀県立名護屋城博物館(釜山市立博物館 寄贈)
延世大学校博物館編『延世大学校博物館展示品図録』	延世大学校出版部
부산박물관『2002 기증유물도록』	부산박물관(釜山博物館 寄贈)
『所蔵品図録』	東亜大学校博物館
『博物館研究論集』10	釜山博物館
서울대학교 규장각『규장각 명품도록 Selected items from the kyujaggak collections』	서울대학교 규장각
『부산직할시립박물관 소장유물』	부산직할시립박물관(釜山直轄市立博物館 寄贈)
『서울大学博物館所蔵 韓國伝統繪畫』	서울大学校博物館
서울대학교박물관『서울대학교박물관 인류민속도록』	서울대학교박물관



受贈資料一覧

タイトル	発行所
ICCSニュースレター No.2, No.3 国際中国学研究センター発足記念講演会『21世紀日中経済関係のゆくえ』	愛知大学ICCS(国際中国学研究センター)事務局
大阪大学21世紀COEプログラム『インターフェイスの人文学』 ニュースレター No.1, No.2	「インターフェイスの人文学」研究開発委員会
『21世紀COEプログラム 疾患関連糖鎖・タンパク質の統合的機能解析』	大阪大学大学院医学系研究科 生化学・分子生物学講座
『21世紀COEプログラム 感染症学・免疫学融合プログラム』	大阪大学 微生物病研究所
『平成14年度セミナー報告書』	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 人間発達科学専攻・COE事務局
『環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測 モニタリングネットワークの構築と人為的影響の評価』	金沢大学21世紀COEプログラム事務局
『関西学院大学 21世紀COEプログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究』 『第1回国際シンポジウム 記録報告書』 『第1回国際シンポジウム 成果報告書』	関西学院大学大学院 社会学研究科 COE研究推進室
『21世紀COEプログラム 天然素材による抗感染症薬の創製と基盤研究』	北里大学生命科学研究科 大学院感染制御科学府
英文紀要『Interaction and Transformations; Bulletin of Japan Society for the Promotion of Science 21st Century COE Program (Humanities), East Asia and Japan : Interaction and Transformations, Volume1』	21世紀COEプログラム 九州大学「東アジアと日本: 交流と変容」
『NEWS LETTER』No.1, No.2 『漢字と文化』No.1, No.2	京都大学大学院法学研究科21世紀COE事務局 京都大学人文科学研究所 文部科学省21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 漢字文化の全き継承と発展のために」
岐阜大学21世紀COEプログラム『野生動物の生態と病態から見た環境評価』 『Newsletter』No.3, No.4 『平成14年度成果報告書』 『Newsletter』2003, No.1	COE「野生動物の生態と病態から見た環境評価」事務局 慶応義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点 心の統合的研究センター 慶応義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」21COE多文化市民意識研究センター
『2002年度研究拠点形成成果報告書』 『21世紀COEプログラム 神道・日本文化の国学的研究発信の拠点形成 「日本における神観念の形成とその比較文化論的研究」研究報告』 『神道・日本文化研究国際シンポジウム(第2回) <神道>はどうか翻訳されているか』 『Japanese College Students' Attitudes Towards Religion』	慶応義塾大学21世紀COEプログラム「次世代メディア・知的社会基盤」 國學院大學21世紀COEプログラム
『21世紀COEプログラム 健康・スポーツ科学研究の推進』	筑波大学大学院博士課程・人間総合科学研究科 体育科学専攻・スポーツ医学専攻
『21世紀COEプログラム「歯と骨の分子破壊と再構築のフロンティア」 ゲノム歯骨科学とナノサイエンスの研究教育拠点』 第4回シンポジウム抄録、第5回シンポジウム抄録 『史資料ハブ 地域文化研究』No.1, No.2	東京医科歯科大学21世紀COEプログラム 「歯と骨の分子破壊と再構築のフロンティア」 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」
『Wind Effects News』No.1, No.2 『21世紀COEプログラム 都市・建築物へのウィンド・イフェクト』	東京工芸大学工学研究科風工学研究センター
『バイオ科学とナノテクノロジーの融合に向けて』 『First International Symposium on Bioscience and Nanotechnology』	東洋大学21世紀COEプログラム 「バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター」
『21世紀COEプログラム UTCP』 『NEWS LETTER』No.1, No.2 『21世紀COEプログラム ジェンダー法・政策研究センター』	東京大学教養学部 共生のための国際哲学交流センター(UTCP) 東北大学大学院法学研究科COE支援室 21世紀COEジェンダー法・政策研究センター
『21世紀COEプログラム バイオ・ナノテクノロジー基盤未来医学』(日・英版) 『外部評価報告書』 『Radiation and Humankind』	東北大学大学院工学研究科バイオロボティクス専攻内 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 「放射線医療科学国際コンソーシアム」 名古屋大学大学院文学研究科
『統合テキスト科学研究2003』(日・英版) 『統合テキスト科学の構築』討議資料No.1, No.2, No.3 『Creation and Practical Use of Language Texts 2003』	
『21世紀COEプログラム 日本大学 生物資源科学部』 『現代経済システムの規範的評価と社会的選択』	日本大学 生物資源科学部 一橋大学21世紀COEプログラム
『21世紀COEプログラム 社会的環境管理能力の形成と国際協力拠点』	広島大学大学院国際協力研究科 広島大学国際環境協力プロジェクト研究センター
『法政大学国際日本学研究所研究報告』No.1, No.2 『年報2002』 文部科学省21世紀COEプログラム採択 日本発信の国際日本学の構築 研究成果報告集『国際日本学』No.1	法政大学国際日本学研究所
『北大時報号外 特集 平成15年度 21世紀COEプログラム』 『スラブ研究センターニュース 季刊 2003年秋号』 『21世紀COEプログラム 生物・生態環境リスクマネジメント』 『中世の密教世界～修法の覇者が夢のあと。』	北海道大学 北海道大学スラブ研究センター 横浜国立大学大学院 環境情報研究院 立命館大学21世紀COEプログラム 「京都アート・エンタテインメント創成研究」

主な研究活動

全体会議

第7回 5月14日（於：横浜キャンパス1号館 308会議室）

1～4班の班長により、初年度の活動経過と今年度の調査研究計画が報告された後、プロジェクト全体の方向性を巡っての論議がなされた。終了後、1号館8階で懇親会が新しい構成員も交えて開かれ、活発な意見交換が行われた。



研究会

（3月11日～5月31日実施分）

各研究テーマに沿った勉強会や情報交換、各々がおこなった現地調査の報告発表、専門分野に関する発表など、各班ごとに随時開催している。

3月11日、4月2日、5月21日・1班

『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編さん刊行について

3月26日、4月5日・1班

東アジア生活絵引きの編さんについて

3月29日、4月9日、5月14日・1班

近世・近代生活絵引きの編さんについて

4月23日・4班

佐野 賢治

“非文字資料”と地域社会 福島県只見町の民具保存活用運動

フレデリック・ルシーニュ

中国雲南省麗江納西族東巴文化についての調査報告

5月14日・3班

平成15年度年報合評会

5月21日・4班

宇佐見 義之

『バーチャル地球史博物館 生物進化史展示の試み』展示解説

共同研究員である宇佐見助教授が企画運営する『バーチャル地球史博物館』では、大型スクリーンに映し出された6億年にわたる「生命の進化の歴史」を、バーチャルな空間の中で体験することができる。4班テーマ「文化情報発信の新技术の開発」の研究活動につなげていくため、班員他関係者が見学した後、論議を行った。





主な研究活動

現地調査

(3月9日～5月31日実施分)

河野 通明	静岡県静岡市・掛川市・大井川町・藤枝市 (3月9日～11日)
登呂博物館・大井川町民俗資料保管庫他の耨摺り臼、犁など由来農具の比較調査	
三鬼 清一郎	愛知県名古屋 (3月12日～17日)
倭城、倭館関係の資料の所在確認および調査研究	
八久保 厚志	静岡県沼津市 (3月15日～16日)
沼津市三浦地区の景観変化の実態調査	
山口 建治	新潟県佐渡郡新穂村 (3月15日～17日)
歴史民俗資料館でののろま人形など人形芝居調査	
金 貞我	韓国 ソウル・釜山 (3月16日～23日)
国立民俗博物館・潤松美術館・釜山大学・釜山近代歴史館での韓国版「常民生活絵引」編さんのための図像資料調査	
河野 通明	福島県只見町・金山町 (3月20日～21日)
只見町教育委員会・金山町こぶし館他の耨摺り臼、犁など由来農具の比較調査	
香月 洋一郎	高知県長岡郡大豊町立川仁尾ヶ内 (3月20日～26日)
環境と景観における資料調査	
君康道、ジョン・ボチャリ	岐阜県白川村・高山市・八幡町 (3月23日～26日)
中部地方における非文字資料調査・収集	
河野 通明	愛媛県松山市・北条市・川之江市他 (3月27日～31日)
愛媛県立歴史民俗資料館・かわのえ高原ふるさと館他の耨摺り臼、犁など由来農具の比較調査	
廣田 律子	秋田県田沢湖芸術村 (3月29日)
わらび座にて中国人演者の動きをモーショントラッキングで記録、分析する為の予備調査	
河野 通明	山形県山形市・中山町・新庄市・村山市・大江町 (4月22日～25日)
山形県立博物館・新庄ふるさと歴史センター他の耨摺り臼、馬鍬など由来農具の比較調査	
川田 順造、芦澤 玖美	中国 北京 (4月27日～5月1日)
中国科学院遺伝与发育生物学研究所にてモンゴル出張(8月予定)に係る予備調査	
香月 洋一郎	高知県高知市・長岡郡大豊町立川 (4月29日～5月5日)
高知県立図書館郷土資料書庫・仁尾ヶ内における環境認識の定点観測的調査	
河野 通明	山形県山辺町・大石田町・鶴岡市・羽黒町 (5月6日～9日)
致道博物館・松が岡開墾記念館他の耨摺り臼、馬鍬、四季耕作図、明治農具絵図などの調査	
大里 浩秋、河野 通明	秋田県鹿角市・大館市 (5月20日～23日)
花輪図書館民俗資料室・大館市郷土博物館他の鍬、馬鍬、荷鞍、農耕鞍など由来農具の比較調査	
丸山 宏、網野 暁	中国 雲南省・麗江県 (5月24日～28日)
東巴文化研究院他で納西族の宗教文化における経典とその表現方法、内容の調査	
八久保 厚志、藤永 豪	岩手県遠野市 (5月29日～31日)
東北地域の山村集落における景観変化の調査研究	

研究担当者紹介

2004年度より、新たに3名のCOE教員、6名の共同研究員が加わりました。

COE教員・共同研究員

氏名	所属・役職	専門	所属班
	COE教員	中村 ひろ子 COE 特任教授 博物館学・民俗学	1班
	COE教員	浜田 弘明 桜美林大学 資格・教職教育センター 助教授 / COE 非常勤講師 文化地理学・博物館学	3班
	COE教員	青木 俊也 松戸市立博物館・学芸員 COE非常勤講師 日本民俗学	4班
	共同研究員	夏 宇継 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 非常勤講師 中国民俗学	2班
	共同研究員	楠本 彩乃 (株)シンエイ 商品研究室・室長 自然人類学	2班
	共同研究員	彭 国躍 神奈川大学大学院外国語学研究科 中国言語文化専攻・教授 言語学	2班
	共同研究員	田口 洋美 東京大学大学院新領域創成科学研究科 / 狩猟文化研究所代表 環境学・民俗学	3班
	共同研究員	増野 恵子 早稲田大学、相模女子短期大学 非常勤講師 美術史	3班
	共同研究員	能登 正人 神奈川大学大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻・助教授 計算機科学・システム情報工学・人工知能	4班

新COE研究員(R.A)紹介

氏名	所属	専門
大坪 潤子	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻 後期博士課程在学	日本近現代史
樫村 賢二	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻 後期博士課程在学	民俗学
彭 偉文	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻 後期博士課程在学	民俗芸能

編集後記

プロジェクトも2年目に入り、表紙の色もスクールカラーのブルーに変わった。新企画の対談では、その豊富な内容の一部しか再録できずに、残念。各班の具体的成果が今期の紙上ににぎやかしてくれることを期待したい。(佐野)

新年度を迎えて本プロジェクトに新しいCOE教員・共同研究員・RAの方々が加わりました。本紙の内容にも対談などの新企画が登場するなど初めてづくし。創刊号と同様に手探り状態の編集作業でしたが、気分新たに4号目を刊行するはこびとなりました。(関)



COE拠点の案内標識
(横浜キャンパス21号館前)

日本常民文化研究所

神奈川大学日本常民文化研究所論集『歴史と民俗』20号

2004年3月発行

発行所：(株)平凡社

内容：小特集・戦争の記憶と記録「軍神」空閑少佐再考 捕虜・自決をめぐる言説と伝承（本康宏史）/
忠霊塔に関する 考察 その意匠と祭祀形態をめぐって（今井昭彦）/ 防空壕（西和夫）
近世神社領の土地管理組織 大山崎離宮八幡宮領を事例として（田上繁）
「さかい」の論理と「あいだ」の論理 - 言語の人類学的側面（小馬徹）



巡回展「ぬいもの・つくろいもの 暮らしのなかの知恵と技」

本研究所で行った企画展を巡回展示。「あつぎの衣類」を併催。

日程：2004年6月28日(月)～7月19日(月・祝)

休館日：会期中なし

会場：厚木市郷土資料館2階 特別展示室

共催：厚木市教育委員会・神奈川大学日本常民文化研究所

講演会「仕事着とハレ着 “衣服を着ること”の意味をめぐって」

日時：2004年7月10日(土) 14:00～15:30

会場：厚木市郷土資料館1階 学習相談室

講師：中村ひろ子（神奈川大学COE特任教授）



巡回展・講演会のお問い合わせは厚木市郷土資料館まで
〒243-0003 神奈川県厚木市寿町3-15-26 Tel. 046-225-2515

歴史民俗資料学研究科

『資料集 神奈川大学大学院 歴史民俗資料学研究科

10年の歩み』

2004年3月発行

編集・発行：神奈川大学大学院
歴史民俗資料学研究科

本研究科が1993年に創設されてから現在に至る10年間の活動の足跡をまとめたものです。



福田アジオ編『小川島の民俗

群馬県利根郡月夜野町下津小川島』

神奈川大学歴史調査報告第1集として刊行されました。

2004年3月発行

発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

人文学研究所

『人文学研究所報』No.37

2004年3月発行

編集・発行：神奈川大学人文学研究所

内容：上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について(大里浩秋)
/『申報』における楽善堂の広告宣伝活動<1880～1893年>(陳祖恩)/『新青年』時代の周作人と日本「貞操論」を中心に(劉軍)/平和の鳩 ヴェルダ マーヨ 反戦に生涯を捧げたエスペランチスト長谷川テル(中村浩平)/御宿町における有料老人ホーム入居者の属性と前住地(平井誠)/わが国における伝統的酒造業の革新と持続的成長(八久保厚志)/『哲学字彙』和製漢語 その語基と生成法・造語法(高野繁男)/活動報告



非文字資料研究 No.4

発行日 第4号 2004年6月30日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

The Center of Kanagawa University 21st.Century C.O.E.Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661

Fax.045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp>

